宮城県文化財調査報告書第139集

上　野　館　跡

―茂庭氏居館跡―

平成２年３月

宮城県教育委員会

序　文

県教育委員会では昭和26年に松山町立松山中学校として建設され、その後、増改築を加えて使用してきた宮城県松山高等学校が老朽化したため、校舎を新築することになりました。

学校用地については費用等の諸般の事情から現校舎敷地内に新築せざるをえなかったわけですが、この地が近世伊達氏の家臣である茂庭氏の居館跡でもあることから、埋蔵文化財を出来る限り保護することと、校内敷地の有効な活用をも考慮して校舎の建設地を決定いたしました。

松山中学校建設の際に大規模な土地造成により遺構が破壊されていることも推定されたので、昭和63年度に遺構の存否を確認する調査を実施したところ、多数の建物跡が発見されたため校舎建設予定地および仮校舎建設地について発掘調査が必要になりました。

発掘調査は昭和63年と平成元年の2年間で延べ3ケ月間、生徒への学業への影響をも考慮して、夏季休業期間中に集中して3次にわたって実施いたしました。その結果、居館内の建物や池、通路等が発見され、文献等の記録では知りえない館の変遷を明らかにすることができました。

調査で遺跡の一部は記録にとどめるだけになりましたが、調査の成果が理解され、文化財の保護思想の普及に寄与できれば幸いです。

本書を刊行するにあたり、調査で多大な御協力を賜った松山町教育委員会をはじめ関係各位に対し、厚く感謝の意を表して巻頭の言葉といたします。

平成2年3月

宮城県教育委員会

教育長　武田武男

例　　言

1. 本書は宮城県教育庁が計画した宮城県松山高等学校校舎新築に伴う、上野館跡の第1次～第3次発掘調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査にあたっては、松山町教育委員会ほかの関係機関をはじめ多数の方々から多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
4. 本書における土色、土性、陶器の色調についての記載には「新版標準土色帖」(1973年)を利用した。
5. 本書は文化財保護課の下記調査員が協議を行い、伊藤　裕が執筆編集したものである。
6. 発掘調査の記録や整理に関する資料及び出土品については宮城県教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。
7. 磁器の図版トレースには、渡辺宗昭、水谷美香子の協力を得た。

調査要項

1. 遺　跡　名　上野館跡(宮城県遺跡地図地名表登載番号32007　遺跡記号　ＫＮ)
2. 現地調査期間・調査面積　第1次調査―昭和62年7月26日～8月26日　約225m^2
   第2次調査―平成元年4月24,5日　約180m^2
   第3次調査―平成元年8月22日～10月27日　約2,700m^2
3. 調査主体者　宮城県教育委員会
4. 調査担当者　宮城県教育庁文化財保護課
   調　査　員　進藤秋輝、手塚　均、斎藤吉弘、阿部　恵、阿部博志、佐藤広史、古川一明、菊池逸夫、須田良平、伊藤　裕、吉田雅之、鈴木真一郎、加藤明弘、岩見和泰、大和幸生、木皿直幸
   整理担当―手塚、伊藤、加藤、岩見
5. 協　　力　宮城県松山高等学校、松山町教育委員会、茂庭邦元、及川　寛、井口祐二(松山町立ふるさと歴史館)

目　　次

序　文
Ⅰ．はじめに …… 1
Ⅱ．調査に至る経過 …… 3
Ⅲ．調査の方法と経過 …… 5
Ⅳ．発見された遺構と遺物 …… 6
(1)第１次調査 …… 6
(2)第２次調査 …… 8
(3)第３次調査 …… 8
(4)出土遺物 …… 27
Ⅴ．考察 …… 39
Ⅵ．まとめ …… 43
参考文献

写真図版一覧

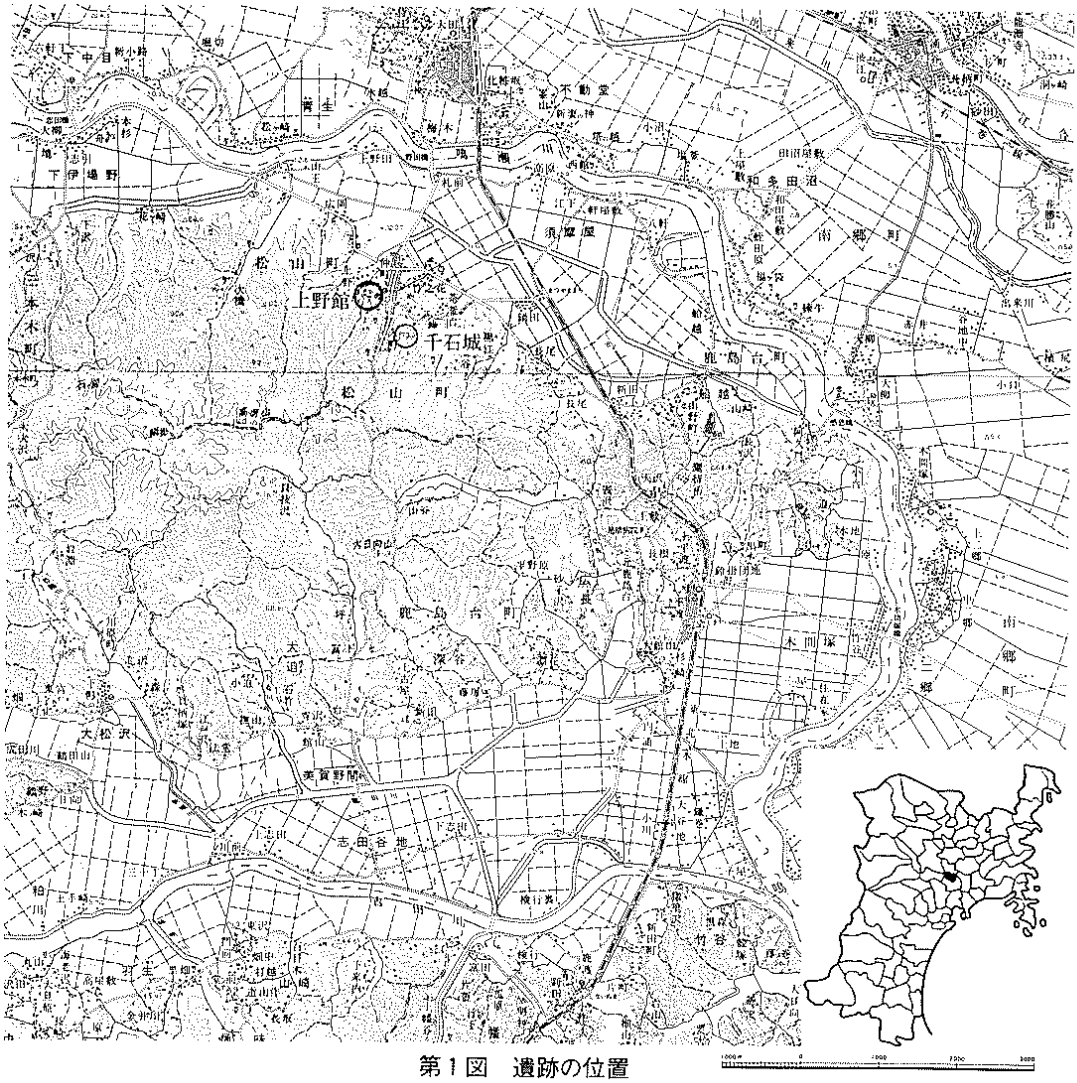
写真図版1　ＰＬ1．Ａ－1区　遺構検出状況
ＰＬ2．Ａ－2区トレンチ
ＰＬ3．Ａ－2区トレンチ
ＳＸ01池跡検出状況
写真図版2　ＰＬ4．Ａ－3区トレンチ
ＰＬ5．Ａ－3区トレンチ　探掘り部分
ＰＬ6．Ａ－3区トレンチ　探掘り部分
写真図版3　ＰＬ7．ＳＡ01柱穴列
ＰＬ8．ＳＡ02打込杭列
ＰＬ9．ＳＡ02打込杭列　検出状況
写真図版4　ＰＬ10．Ｃ－1区
東側の建物跡群と溝跡・炭窯
ＰＬ11．ＳＤ07溝跡
ＰＬ12．ＳＤ08溝跡とＳＤ09溝跡
写真図版5　ＰＬ13．ＳＤ15溝跡
ＰＬ14．ＳＤ13溝跡
ＰＬ15．ＳＫ01土壙
写真図版6　ＰＬ16．ＳＫ02・05・18土壙周辺
とＳＸ04通路状遺構
ＰＬ17．ＳＫ02・05・18土壙周辺
ＰＬ18．ＳＫ02土壙とＳＫ05土壙
写真図版7　ＰＬ19．ＳＫ13土壙
ＰＬ20．ＳＸ01池跡
ＰＬ21．ＳＸ03通路状遺構と
ＳＤ15溝跡
写真図版8　ＰＬ22．ＳＸ03通路状遺構の柱穴
ＰＬ23．ＳＸ04通路状遺構とSK06土壙
ＰＬ24．ＳＲ01炭窯跡
写真図版9　ＰＬ25．ＳＲ01炭窯跡
（前庭部から焚口方向）
ＰＬ26．ＳＲ01炭窯跡
ＰＬ27．Ｃ－2区　遺構検出状況
写真図版10　出土遺物(1～7：Ａ－1区。
8～18：ＳＸ01池跡)
写真図版11　出土遺物(9を除きＳＸ01池跡)
写真図版12　出土遺物(1～3：ＳＸ01池跡。
4～7：ＳＸ02池跡。8～10：土壙)
写真図版13　出土遺物(土　壙)
写真図版14　出土遺物(1～7：土壙。8～13：遺構外)
写真図版15　出土遺物(各地点出土の土師質・瓦質土器など)
写真図版16　出土遺物(各地点出土の瓦類)
写真図版17　出土遺物(瓦質・土師質・土器と陶器)

Ⅰ．はじめに

立地と現状　上野館(うわのだて)跡は志田郡松山町千石字松山に所在する近世仙台藩の上級武士茂庭(もにわ)氏の屋敷跡である。松山町は仙台市から直線距離で約32㎞北西に位置しており、南を大松沢丘陵、北を鳴瀬川に画されている。丘陵麓と鳴瀬川とのあいだには肥沃な耕土がひらけ、近世初頭の新田開発以来、県内有数の稲作地帯の一つとして名高い。

遺跡は北北東に延びる7つの丘陵端部のうちほぼ中央部の丘陵先端から600mほど南にはいった地点に位置し、現在は県立松山高等学校・稲荷神社・上野地区の集会所の敷地となっている。標高37.6～39m前後、沖積地との比高差は約25mで北～南東部が急傾斜であるのに対し西部は比較的なだらかに沖積地につづいている。

現地形は東西約170m、南北約150mで、四周の道路より5～6m（西辺）ないし3～4m(北･東辺)



第１図　遺跡の位置

高くなっているが、南辺は校舎の増築時に削平拡張されたため低くなっている。現在高校校門のある東辺中央部はかつて館の表門があった位置で、その正面の急坂を下ると館にのぼる馬の体を清めたといわれる駒池を経て、南西～北東に細長くのびた低地にでる。そこは旧千石村で町場があり、南端の入(いり)町には昭和 30 年代まで足軽屋敷が残っていた。その一帯では現在でも屋敷地の短冊型の地割りが大きく損なわれず、往時のたたずまいを窺い知ることができる。

上野館について　現在の松山町・鹿島台町付近は8世紀初め頃から小田郡余戸郷、11世紀末頃から長世保と呼ばれている「松山」の地名が歴史に現われてくるの16世紀前半のことで、天文7年(1538)の伊達氏「御段銭古帳」に「松山之庄」という記載が見える。

天正19年(1591)豊臣秀吉の「奥州仕置」によって伊達政宗が米沢から岩出山に移封されると、松山の領主も遠藤出羽高康から石川大和昭光にかわった。慶長3年(1598)には仙台藩奉行の古田内匠重直が石川氏にかわり、慶長8年(1603)に茂庭主水良綱(周防良元)が古田氏にかわって西磐井郡赤萩(現一関市)より松山へ移封された。良綱は遠藤氏の居城であった千石城の三の丸を修復してはいり(後に上野館を居館とする)、以後幕末に至る11代265年間、茂庭氏が松山の領主となった（註　仙台藩は地方知行制であり、上級家臣は城、要害、所(ところ)、在所をそれぞれ拝領して、領民に対し独自の行政権と一定の裁判権を行使した。茂庭氏の家格は「一族」で所拝領であった）。茂庭氏が移封された当時の松山郷は千石・次橋・金谷など14カ村からなっており、良綱の知行高は536貫517文(約5,365石)であった。茂庭氏は藩の新田開発奨励策のもとで野谷地(のやち)(開田可能な低湿地)の開発につとめ、延宝3年(1675)には14,348石にまで知行高が増加している。同氏は代々仙台藩の奉行・若老(家老・若年寄に相当)など要職を勤めたが、近世末には当主の早世などの困難のなかで幕末維新をむかえた。戊辰戦争に敗れた仙台藩は官軍側の進駐するところとなり、松山は明治元年(1868)土浦藩(土屋相模守)の取締地となった。このため茂庭家は上野館から退去して仙台小鶴の別邸に移り、幕藩体制下での歴史を終えることになる。

上野館は一般に松山城と呼ばれることもあるが、江戸幕府の定めた一国一城令のもとでの城ではなく仙台藩における「要害」にも該当しない、茂庭家の居館である。この居館(以下館と略記)は松山移封28年後の寛永8年(1631)に下屋敷として築かれ、良綱の子周防定元の明暦3年(1657)に作事を行い正式に居館として仙台藩から許可されている。

それまで居館としていた千石城三の丸は標高約70mの丘陵上にあり、東西29間、南北69間で北側に東西29間、南北13間の小曲輪(くるわ)が付属し、それらを高さ3間の土塁で囲んだものであったが、領内統治の場としては高所のため不便であった。このため千石城より低い立地をもつ上野館がのちに正式な居館となるものと「松山町史」では推定している(茂庭、鈴木、宮本1980)。

館の規模を知るうえで参考となる絵図には寛永年間・天和元年(1831)・文政9年(1826)作の

3葉と、幕末ごろの館内の建物配置が描かれた作成時期不明の1葉の4種類がある。寛永絵図では上野館は東西80間、南北68間の「下屋敷」として描かれており、天和絵図では東表85間、西裏84間、北脇72間、南脇67間で、西南が東西4間、南北15間分内側に入り込んでいる。表門は東辺にあり幅5間、四方に土塁と道路がまわっており、土塁の高さは東辺が1丈4尺、西辺2丈1尺南辺1丈北辺2丈で、上部に白壁の塀がまわっている。道路幅は5間とある。

前述の3葉の絵図には館内の建物は描かれていないためその配置や変遷には不明な点があるが、「松山町史」では『茂庭家記録』に拠って、貞享2年(1685)の藩主伊達綱村来訪に際しての湯殿・厠の新築、元禄元年(1689)の大書院・御座の間(当主の居所)等の普請、元文2年（1737）における御成書院(藩主が来訪時に使用)の存在等をあげている。

明治維新後、館の建物は奥(領主の私生活の場)の御座の間のある1棟を残して解体され、敷地は畑地となった。残った1棟はその後大正末年まで茂庭家の住宅となっていたが、昭和26年に町立松山中学校の校地となって取り壊され、駐日アメリカ軍の重機を利用して校地造成工事が行われた。

Ⅱ．調査に至る経過

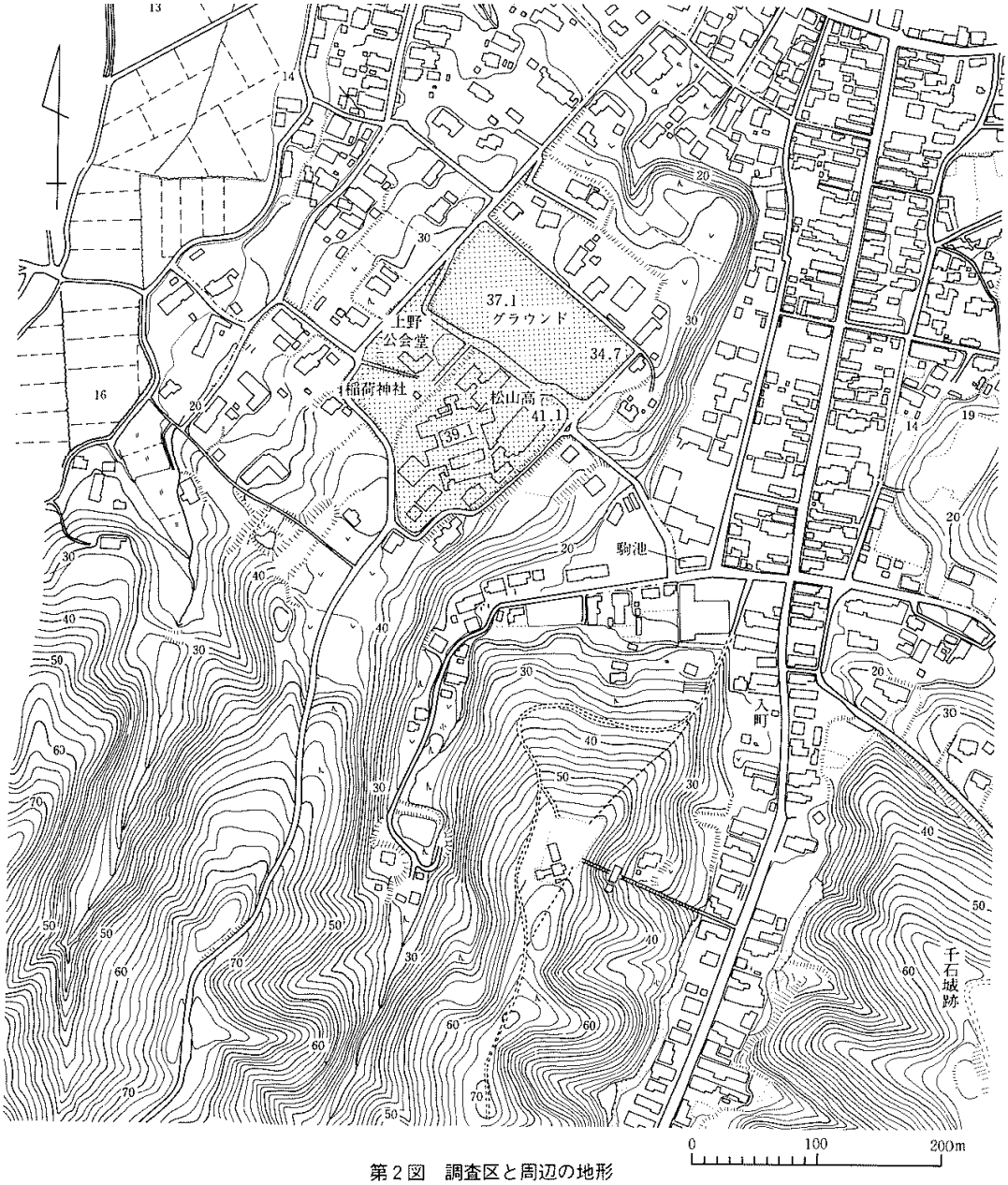
前章でふれたように、上野館の地には昭和26年松山中学校が建設されたが、その後中学校は別地へ移転したため、校舎は県立古川女子高等学校松山分校の使用するところとなった。同校は昭和53年に県立松山高等学校として昇格し現在に至っている。

本書で報告する3次にわたる発掘調査は、松山高等学校の老朽化した木造建築を全面的に撤去し、新築する計画に起因したものである。

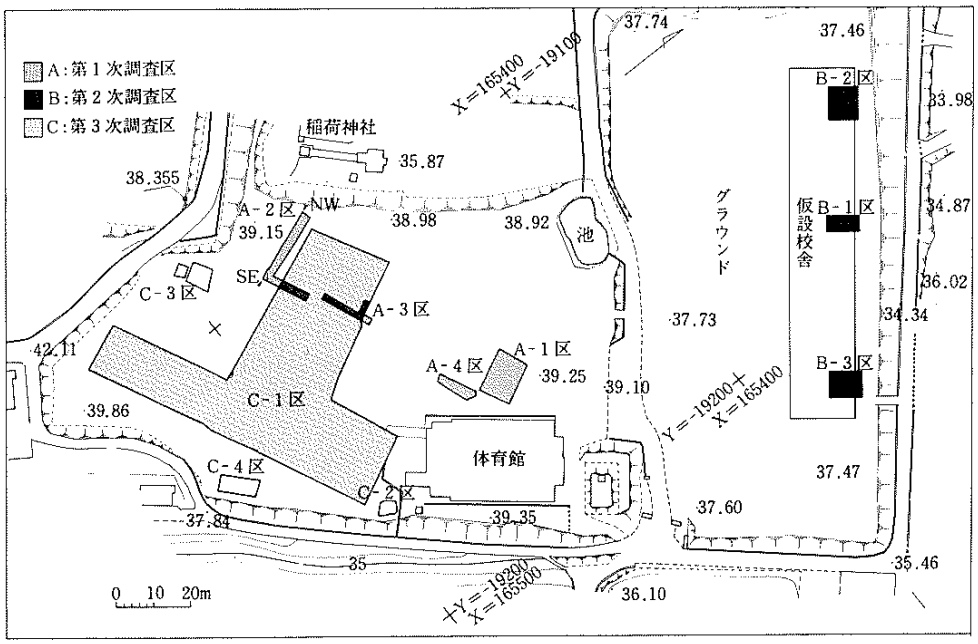
昭和62年度に校舎新築計画が具体化したため、昭和63年4月に工事計画を担当する宮城県教育庁財務課と文化財保護課とで協議がもたれた。協議では校舎の建設位置、仮校舎の建設位置、調査の時期と方法等が検討された。その結果、先に述べたように昭和26年の大規模な土木工事により遺構が壊滅的に破壊を受けている場合や、木造校舎であるために掘立柱建物跡であれば遺構が残存している場合も考えられたため、とりあえず遺構の遺存状況を確認する調査を早期に実施することにした。

この第1次調査(昭和63年7月26日～8月26日)では校舎がまだ使用中だったため、これを避けて第3図のように推定遺跡範囲の西側及び中央部の2か所に調査区を選定した（A区）。調査の結果Ａ－1区で複雑に重複する掘立柱建物跡群、2区で整地層や池跡が検出された。遺構の遺存状況が予想外に良好であることから、建設予定地全面の調査が必要になった。また校舎の建設位置は削平の著しい南寄りに、仮校舎はグラウンドの有効な活用を加味して西端に建設することになった。

仮校舎建設地の調査が第2次調査(平成元年4月24.25日)である（B区）。仮校舎では地桁周り便槽部分が深掘りされるため、計画位置を中心に調査を実施した。その結果昭和26年の造成工事による盛土は北西側で厚く0.7～1.6mに及ぶこと、調査区中央部付近で幅4m、深さ1.2mの須恵器片を含む溝跡が発見され、台地の西～北端まで遺構がのびることが確かめられた。



第２図　調査区と周辺の地形



第３図　調査区位置図

校舎建設予定地の2,700m²を対象とした第3次調査(平成元年8月22～10月25日－C区)では南西側は大きく削平され、幅4mの居館西限の道路跡と推定される遺構がかろうじて検出できただけであったが、調査区東部～北東部では掘立柱建物群や池跡、通路状の遺構を検出するとともに、文献では知りえない上野館の変遷をも把握できた。

これまでの調査で、体育館建設予定地(平成2年度調査予定)を除き大部分の調査が終了したことになる。

III. 調査の方法と経過

第1次調査はII章で述べたように遺構の遺存状況を確認するためのものであったため、調査区は校舎の間の空間地に任意に設定した。A－1区では掘立柱建物跡群が重複して確認された。

柱穴は埋土上部のみを数cm掘り下げるにとどめ平面図といくつかの断面図を作成した。A－2区・3区では厚い盛土層下に整地層が認められたため、これらの層位的関係と旧地形を知るために深掘りを行ない、断面図を作成した。この部分では整地層上面から掘り込まれた池跡、溝跡、ピットなどが検出されており、第3次調査でその延長部が検出されたものもある。

第2次調査は深掘りされる便槽部分のトレンチ調査である。

第3次調査は新校舎建設部分に対する事前調査である。建設部分にC－1区～4区を設定して調査を行った。調査区のうちC－1区では南辺の東西軸を基準線として、これに直交する南

北方向の基準線を設定して3m方眼のグリッドを組んだ。基準杭A－Cを結んだ調査区基準線は国家座標の座標北から23.5°西偏している。グリッドは基準杭Aからの距離によってE3 N3というように名称を付した。

調査は1区東側から表土の除去を開始した。北寄りで検出された池跡1・2等は人力では堆積土除去が困難であったため重機を使用したが、このため出土遺物の層位的把握に一部難を生じた。遺構の平面図は遣り方によって1/20で作成し、調査区の平面図は平板測量によって1/100で、断面図は1/20でそれぞれ作成した。調査中にモノクロとカラーで写真を撮影して記録としている。

なお調査中に現地説明会を開催して、地元の方々に調査成果の概要を公開した。

Ⅳ．発見された遺構と遺物

3次にわたる調査の結果検出した遺構は、掘立柱建物跡10棟以上、柱穴列1、打ち込み杭列1、溝跡16、土壙28、通路状遺構1、池跡2、炭窯跡1である。以下では調査の順を追って遺構の内容を述べ、出土遺物は後節で一括して扱うこととする。

(1)第１次調査(第３図、第４図、第６図　写真図版１・2)

Ａ－1区で掘立柱建物跡、2・3区で溝跡、池跡、ピット、整地層を確認した。1・4区は、旧表土が遺構面上面まで若干削平され約30㎝厚の盛土(整地Ⅰ)がなされている。1区で掘立柱建物跡の柱穴多数が確認され、柱穴埋め土中から陶磁器片が出土したが、4区では遺物・遺構とも発見されなかった。2・3区では旧地形を復元するため深掘りを行った結果、2区トレンチの東側付近から稲荷神社との境までは整地Ⅰの厚さが40㎝から1.6mに達しており、旧地形はなだらかに神社方向に傾斜していることが判明した。この整地Iは層中に靴のゴム底などの現代の廃築物が含まれているため、昭和26年の松山中学校校地造成に係わるものと考えられる。

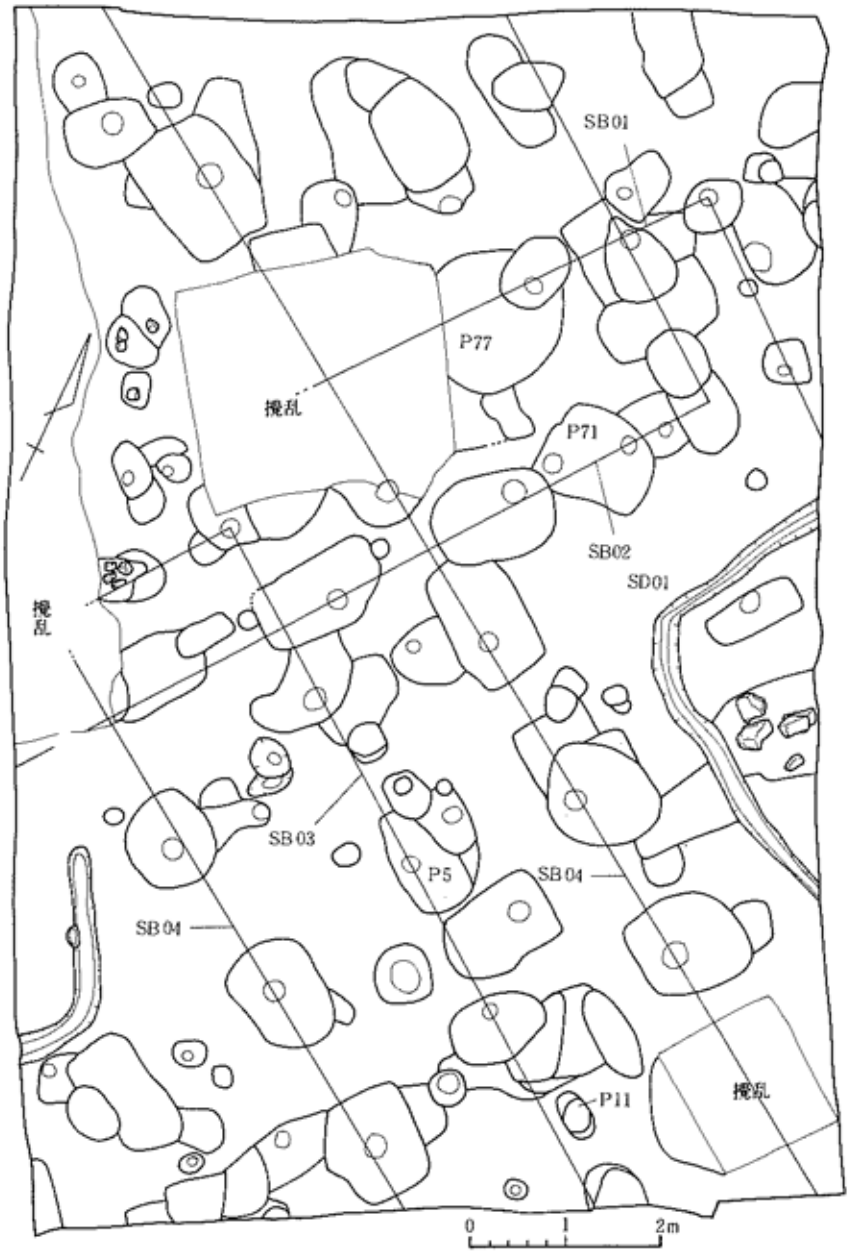
トレンチの北東延長部では館跡に伴う池跡の一部が検出されたが(第3次調査の項参照)、この池の構築面は17層上面（ロームブロックの混じる砂質シルト層）で、整地層と考えられる(整地Ⅱ)。整地Ⅱの上面でＣ－1区ＳＤ16溝跡の延長が検出されている(第6図10層)。また整地Ⅱの下位で溝状の落ち込み(第6図20層以下)が検出された。これは館関連の遺構より古い時期に属すると推定される。また3区では時期不明の溝跡が検出されたが、第3次調査においてＳD15溝跡と一連の溝跡であることが判明した。

掘立柱建物跡(第4図、写真図版1)

Ａ－1区でＳB01～04の4棟を確認した。確認面はいずれも地山面上で、検出した柱穴は100個を超えるため建物の実数はさらに増えると思われる。これらの柱穴も重複しているものがきわめて多く、確認した4棟についても、柱穴の切り合い関係からＳB04→ＳB02→ＳB03

の新日関係が判明した。

4棟とも柱間寸法はほぼ2mの等間隔で、柱掘り方は長軸1～1.5mの長楕円形ないし隅丸方形状を基調とし、柱痕跡の直径は20㎝前後である(いずれも平面観察値)。

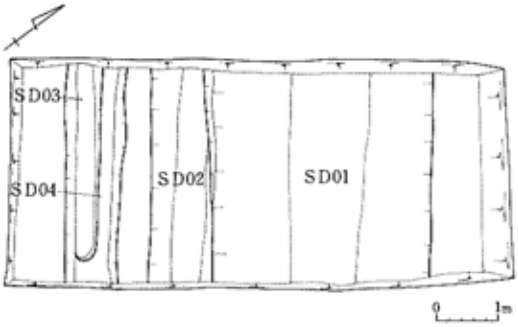


第4図　A－1区の遺構

建物跡の規模・方向は、ＳＢ02が3間以上×2間以上、ＳＢ03が4間以上×1間以上、ＳＢ04が2間×6間以上と一部のみの確認であるため不明だが、ＳＢ04は東西棟の建物にとりつく線あるいは廊下の可能性がある。なお組み合わせを明らかにできなかった多くの柱穴列は、検出した建物跡の棟ないし梁の方向とほぼ同一の方向を示している。

遺物はＳＢ01～03の柱穴埋土から近世の染付磁器皿が出土しており（第4図の番号を付した柱穴）、他の柱穴からも近世の陶磁器片が出土している。

(2)第２次調査(第５図)



第５図　Ｂ－１区検出溝跡平面図

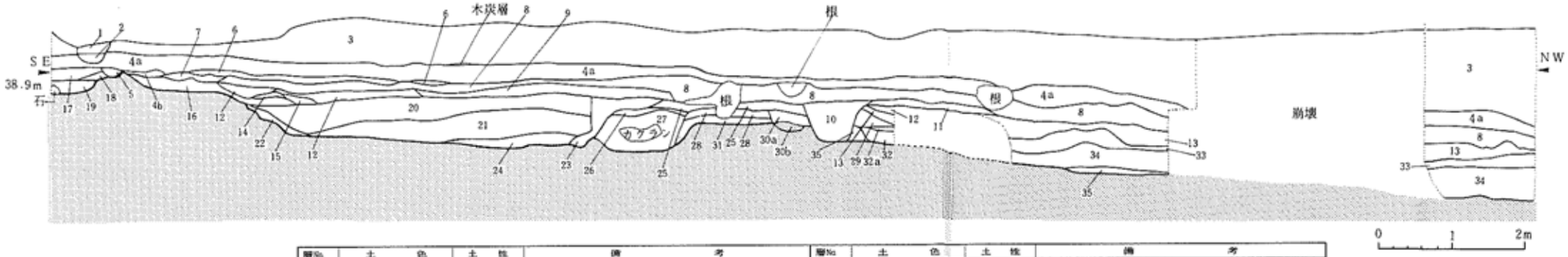
Ｂ－1区・Ｂ－3区では地表下70～1m前後、Ｂ－2区では2m以上の盛土層（整地Ｉ）があり、Ｂ－1区の整地Ｉ下の地山面で溝跡4条を検出した。ＳＤ01は確認面からの深さが80㎝、幅3.5m、ＳＤ02はＳＤ01に切られる深さ36㎝の溝である。ＳＤ03・04は整地Ｉ上から掘り込まれたきわめて新しい時期の溝である。2区では整地Ｉが厚く地山面まで掘り下げることができなかったため、遺構は確認できなかった。また3区では地山面上でも遺構は確認されなかった。各トレンチの間隔が離れているため、1区で検出した溝跡がどの方向に延びるかは判然としない。また比較的浅いレベルで地山面が現われた3区では遺構が削平されている可能性がある。

遺物にはＳＤ01の堆積土中から出土した須恵器片と、その上層の整地Ｉ中から出土した近世の磁器・瓦片がある。

(3)第３次調査(第７図、第８～18 図、写真図版３～9)

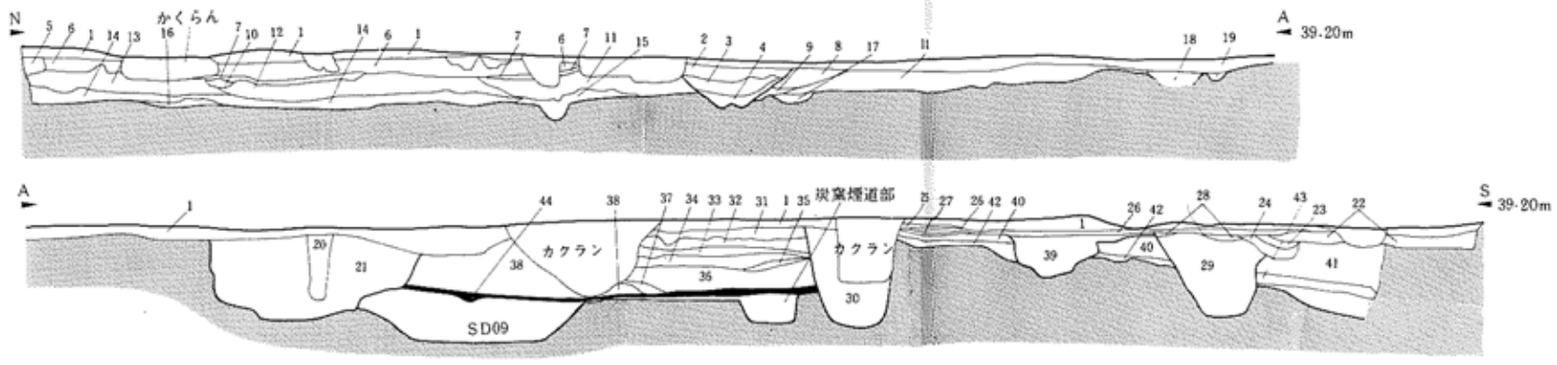
Ｃ1～4区を設定して調査を行なった。このうち1区には第1次調査のＡ－2・3区が一部含まれている。調査の結果1・2区で掘立柱建物跡、柱穴列、打ち込み杭列、池跡、溝跡、土壙、通路状遺構、炭窯跡、ピット群を検出した。3・4区では表土直下で地山面が露出したが、遺構・遺物とも検出されなかった。

遺構は1区の東側と2区中央部の池跡1とその西側の2地点に集中している。調査区内の層位を見ると池跡1以西の旧地形は稲荷神社方向へ緩く傾斜しており、第1次調査Ａ－2区トレンチの層位と対応する整地層（整地Ⅱ）が池跡1の北～東に分布している。一方掘立柱建物跡が集中する東側は、東隅部分に館の構築に関連するとみられる整地層(整地Ⅲ)が残存している(第7図)。この整地Ⅲは2区でも認められるが、他の部分では表土直下で地山面が露出し、学校校地造成時に削平されたものと考えられた。このため、検出された柱穴等の遺構にはきわめ



層No.	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	ロームブロックが混じる。ピットの埋土。
2	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	粘性あり。ピット埋土。
3	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	ローム・焼土ブロック。整地Ⅰ。
4a	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	粘性なし。強土。整地Ⅰ。
4b	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	炭化物微量混じる。整地Ⅱ。
5	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	粘性なし。強土。ピット埋土。
6	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	粘性ややあり。整地Ⅱ。
7	明褐色 (7.5YR5/6)	砂質シルト	粘性あり。しまりあり。焼土、炭化物微量混じる。整地Ⅱ。
8	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	しまりなし。一部グライ化。性格不明。
9	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	粘性あり。しまりあり。混入物は少ない。整地Ⅱ。
10	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	地山のブロック・焼土等混じる。ＳＤ16構堆積土。
11	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	粘性あり。６層に類似。ローム若干混じる。整地Ⅱ。
12	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	粘性あり。砂岩、焼土粒や小礫を含む。整地Ⅱ。
13	明褐色 (7.5YR5/6)	シルト	しまりあり。砂岩のブロック等が混じる汚れた土。整地Ⅱ。
14	褐色 (7.5YR4/4)	砂質シルト	しまりあり。ロームブロック混じる。整地Ⅱ。
15	褐色 (7.5YR4/6)	砂質シルト	しまりあり。ロームブロックやや多く混じる。整地Ⅱ。
16	明褐色 (7.5YR5/6)	シルト	しまりあり。砂岩のブロック等は混じらない。整地Ⅱ。
17	暗褐色 (7.5YR3/3)	砂質シルト	ロームブロックを斑状に含む。整地Ⅱ。
18	明褐色 (7.5YR5/6)	砂質シルト	17層が斑状に混じる。整地Ⅱ。
19	暗褐色 (7.5YR3/3)	砂質シルト	ロームブロックがやや多く混じる。整地Ⅱ。
20	褐色 (7.5YR4/6)	砂質シルト	緻密で粘性大。溝の埋土。
21	褐色 (7.5YR4/6)	砂質シルト	砂岩ブロック・焼土粒混じる。遺構堆積土。
22	黄褐色 (10YR5/6)	ローム	粘性あり。しまりあり。地山の崩壊土。遺構堆積土。
23	褐色 (7.5YR4/6)	シルト	粘性あり。ロームブロックを多く含む。性格不明。
24	褐色 (7.5YR4/6)	砂質シルト	しまりあり。ローム・焼土粒・炭化物等混じる。
25	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	炭化物含む。
26	にぶい黄褐色 (7.5YR5/6)	砂質シルト	粘性あり。しまりなし。遺構堆積土。
27	にぶい黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	しまりなし。遺構堆積土。
28	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	粘性なし。均質でしまりあり。整地Ⅱ。
29	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	粘性なし。砂岩ブロック・ローム部分的に混じる。
30a	褐色 (7.5YR4/6)	砂質シルト	粘性あり。ロームブロックを斑状に含む。遺構堆積土。
30b	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	粘性あり。遺構堆積土。
31	黄褐色 (10YR5/6)	ローム	地山への漸移層。
32a	暗褐色 (10YR3/3)	ローム	ブロック状を呈す汚れた土。整地Ⅱ。
32b	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	同上。整地Ⅱ。
33	黒褐色 (7.5YR3/2)	砂質シルト	均質である。自然堆積土。（旧表土。）
34	黒褐色 (5YR2/2)	砂質シルト	33層と同質。
35	褐灰色 (10YR5/1)	ローム	地山への漸移層。

第６図　Ａ－２区トレンチ断面図



層No.	土色	土性	備考
1	森土	砂利	炭化物が混じる。整地Ⅰ。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物が多く混じる。遺構堆積土。
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒・炭化物が混じる。遺構堆積土。
4	褐色 (10YR4/4)	シルト	同上。遺構堆積土。
5	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	整地Ⅲ。
6	褐色 (10YR4/6)	シルト	整地Ⅲ。
7	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒を斑状に含む。整地Ⅲ。
8	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	遺構堆積土。？
9	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物少量含む。遺構堆積土。？
10	褐色 (10YR4/4)	シルト	遺構堆積土。？
11	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を多く含む。整地Ⅲ。
12	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	木炭粒を多く含む。白色地山ブロックを若干含む。整地Ⅲ。
13	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山の細粒を含む。整地Ⅲ。
14	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山ブロック・地山粒・炭化物を斑状に含む。整地Ⅲ。
15	明黄褐色 (10YR6/8)	粘土	整地Ⅲ。
16	明黄褐色 (10YR6/8)	シルト	炭化物粒を含む。整地Ⅲ。
17	褐色 (10YR4/6)	粘土	遺構堆積土。？
18	褐色 (10YR4/4)	シルト	ＳＢ０７柱穴埋土。
19	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。ピット埋土。
20	褐色 (10YR4/4)	シルト	ＳＢ０６の柱痕跡堆積土。炭化物含む。
21	褐色 (10YR4/4)	シルト	上起柱掘り方。地山ブロックと小礫が多量に混在。
22	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを少量含む。整地Ⅲ。
23	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む。遺構堆積土。？
24	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	遺構堆積土。？
25	暗褐色 (10YR3/4)	砂質土	整地Ⅲ。
26	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	木炭粒を含む。整地Ⅲ。
27	黒褐色 (10YR2/3)		木炭層。整地Ⅲ。
28	褐色 (10YR4/6)	シルト	柱穴掘方埋土。
29	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	大粒の地山ブロックを多量に含む。柱穴掘方埋土。
30	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	ＳＢ０６柱穴堆積土。地山ブロックを多量に含む。
31	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物・地山粒を含む。整地Ⅲ。
32	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	小礫・地山ブロックを含む。整地Ⅲ。
33	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。整地Ⅲ。
34	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック・木炭粒を多く含む。整地Ⅲ。
35	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土ブロック・木炭を多く含む。整地Ⅲ。
36	暗褐色 (10YR3/4))	シルト	小礫・炭化物を少量含む。整地Ⅲ。
37	褐色 (10YR4/4)	シルト	多量の木炭を含む。整地Ⅲ。
38	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	３６層と同一。整地Ⅲ。
39	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒を斑状に含む。遺構堆積土。
40	明黄褐色 (2.5YR6/8)	ローム	地山ブロックを多量に含む。整地Ⅲ。
41	黄褐色 (10YR5/6)	ローム	地山ブロックを多量に含む。整地Ⅲ。
42	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を含む。整地Ⅲ。
43	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	少量の地山ブロックを含む。整地Ⅳ。
44	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	粘土	性格不明。

第７図　Ｃ－１区調査区断面図

第8図　C－1・C－2区遺構配置図

て浅くなっているものがある。なお整地Ⅱと整地Ⅲはともに館に関連するものだが、両者の時期的な関係は把握できない。

また1区で検出された遺構には検出状況からみて近世以前と考えられる炭窯跡・溝跡があり、炭窯構築のためになされたと考えられる、溝跡の埋め立てに伴う小規模な整地層（整地Ⅳ）が整地Ⅲの下位で検出されている。これらの遺構からは土師器・須恵器の破片が出土している。

近世以降の遺物は池跡と土壙の一部およびその周辺の整地Ⅰや整地Ⅱ上から出土しており、他の遺構からの出土はきわめて少ない。以下遺構ごとにその内容を述べるが、溝跡と土壙については近接した位置関係にあるものをまとめて記述する。

柱穴列・打込杭列　（第8図、第10図、写真図版3）

ＳＸ01池跡の南側と北側で検出された。

［ＳＡ01柱穴列］

調査区中央のやや北寄り、ＳＸ01池跡南東部の地山面上で、南西～北東方向の3間分の柱穴列を検出した。検出部分の柱間は北東から2.35m-2.8m-2.3mである。柱穴は長辺50～70㎝、深さ30～40㎝の方形ないし長方形を基調とし、地山粒や炭化物の混じる褐色シルトが堆積している。柱痕跡の直径は15～20㎝前後である。なお本遺構は柱穴列の折り返しがＳＸ02池跡に破壊された掘立柱建物跡の可能性もある。

［ＳＡ02打込杭列］

ＳＸ01池跡の北側で33本の打込杭を検出した。杭は整地Ⅰに覆われ、約70～90㎝の間隔でH字状に並んでおり、周囲の土はグライ化している。本遺構は塀の可能姓があり時期は整地Ⅱと校地造成の昭和26年の間に位置づけられる。

掘立柱建物（第8図～第10図　写真図版4）

1区東側で6棟検出された。

［ＳＢ05掘立柱建物跡］

桁行5間、梁行3間、総柱の南北棟(N-8°-E)地山面上で検出した。ＳＤ07溝跡を切っており、これより新しい。西桁行では南から3間目の柱穴がなく、この部分に出入り口があった可能性がある。建物の総長は桁行9.2m、梁行5.8mで柱間は桁行が東側柱列の南から2.2m-1.8m-1.6m-2m-1.9m、梁行が南側柱列の東から1.9m-1.9m-2mである。柱穴は長軸50㎝～1m前後、深さ7～45㎝の隅丸長方形ないし方形を基調とし、褐色系のシルトが堆積している。柱痕跡の直径は20㎝前後である。

［ＳＢ06掘立柱建物跡]

桁行7間（東桁行は6間割）、梁行3間の南北棟（N-51°-E）で、一部は整地Ⅲの上面で検出されたが、多くは地山面上での検出である。ＳＢ07建物跡より古く、ＳＤ08・09溝跡よ

り新しい。また炭窯の構築時になされた古い時期の小規模な整地Ⅳを切っている(第7図)。南から4列目の梁行では間仕切りと思われる柱穴が3間分検出されている。建物の総長は桁行13.2m、梁行5.6mで、柱間は桁行が西側柱列で北から5間目まで1.2m-1.5m-2m-1.2m-2.9m、梁行は南側柱列の東から2間と3間目の間が1.55mである。間仕切り部柱列は東から1.5m-0.7m-1.0m-2.7mである。柱穴には布掘り状を呈し2～3本の柱を据えたものが西桁行に見られるが、他は長軸0.6～1m、深さ8～76㎝の方形ないし長方形・隅丸長方形を呈する。埋土は褐色系の砂質シルトで、柱痕跡は直径12～30㎝である。東側柱列南端の柱穴から近世の磁器片が出土している。

［ＳＢ07掘立柱建物跡］

地山面上で検出した。南北棟と思われる大規模な建物の一角で、ＳＢ06建物跡より新しい。幅1間の廊下がとりつき、廊下を隔てて2室以上が連なるものと思われる。規模の判明する身舎は5間×1間（柱間は2間分）である。柱間は身舎部分の桁行が1.75m等間、梁行が4m(2間分)で廊下の幅は1.6m、梁行方向が北側柱列で約1.7mである。柱穴は長軸27～40㎝、深さ18～40㎝の楕円形状を基調とし、暗褐色シルトが堆積している。柱痕跡の直径は10～18㎝である。柱穴は長軸50～80㎝、深さ18～29㎝の隅丸長方形状を基調とし、暗褐色ないし黒褐色のシルトが堆積している。柱穴の直径は14～24㎝である。

［ＳＢ08掘立柱建物跡］

桁行3間、梁行2間の東西棟（N-41°-W）で、地山面上で検出した。ＳＢ05建物跡より古く、ＳＢ06建物跡より新しい。建物の総長は桁行5.3m、梁行3.9mで、柱間は桁行が南側柱列の西から3.4m-1.9m、梁行は柱痕跡の検出できたものが少ないため不明である。柱穴は長軸40～90㎝、深さ8～22㎝の隅丸方形ないし楕円形を基調とし、暗褐色ないし褐色のシルトが堆積している。柱痕跡の直径は18～20㎝である。西側柱列北隅の柱穴から鉄製品の破片が出土している。

［ＳＢ09掘立柱建物跡］

桁行2間以上、梁行1間の東西棟(N-4I°-W)で、地山面上で検出した。ＳＢ05建物跡より古く、ＳＢ08建物跡より新しい。検出部分での柱間は桁行が北側柱列の西から3間目と4間目の間が2.7mで、梁行が西側柱列で2.1mである。柱穴は長軸50～80㎝、深さ18～29㎝の隅丸長方形状を基調とし、暗褐色ないし黒褐色のシルトが堆積している。柱穴の直径は14～20㎝である。柱穴の埋土から銅製の不明品が出土している(写真図版15-8)。

［ＳＢ10掘立柱建物跡］

整地Ⅲの上面で検出した方向・規模の不明な建物跡である。南側柱列3間分を検出した。柱間は西から1.94mの1間分のみ明らかである。柱穴は長軸50～70㎝、深さ26～30㎝前後の隅丸

方形ないし楕円形を基調とし、地山まじりの褐色シルトが堆積している。柱穴の直径は18㎝ほどである。柱穴から鉄製の不明品が出土している(写真図版15-7)。

溝　跡(第7図、第10図、第11図、写真図版4)。

［ＳＤ05・06・07溝跡］

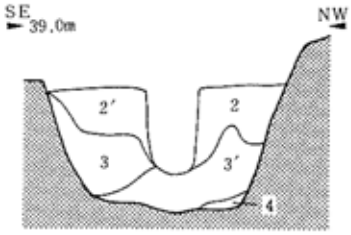
調査区東側の建物跡集中部で一部検出された。

ＳＤ05は地山面上の検出で、ＳＢ08建物跡より古い。ＳＫ14土壙との新旧関係は不明である。南西～北東方向に延びると思われ、幅40㎝、深さ8～18㎝で暗褐色の砂質シルトが堆積している。

ＳＤ06は整地Ⅲおよび地山面上で検出した。ＳＢ06建物跡・ＳＤ07より新しい溝跡で、幅40～50㎝、深さ10～20㎝で南西～北東方向とこれに直交するＴ字状に検出された。堆積土は暗褐色の砂質シルトである。

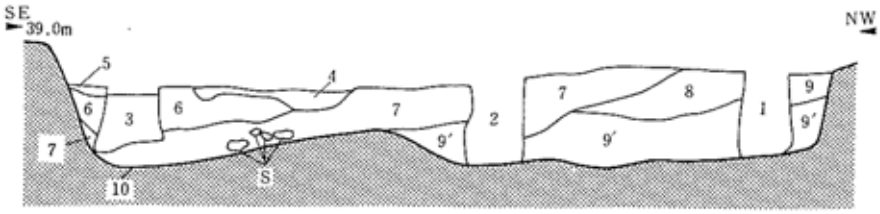
ＳＤ07は地山面上で検出した。ＳＢ05・06・09建物跡およびＳＤ06溝跡より古い溝跡で北西～南東方向に延びており、幅は90㎝

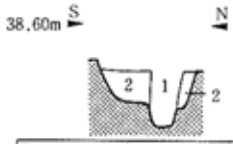
第９図　Ｃ－１区堀立柱建物跡



層No.	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	凝灰岩を含む。
2	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	ローム・ブロックが見じる。
2′	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	ローム・ブロックと凝灰岩の粒子が見じる。
3	黒褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	小礫・凝灰岩粒子が見じる。
3′	黒褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	小礫・凝灰岩粒子が見じる。
4	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	粘性ややあり。

SB05-P 1 断面



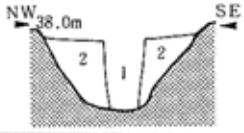


層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	炭化物が見じる。
2	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	白色の地山ブロックを含む。

SB07-P14・断面

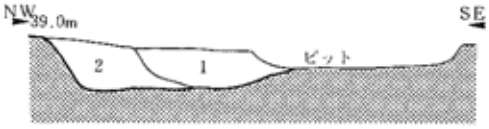
層No.	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	炭化粒が見じる。
2	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	炭化粒が見じる。
3	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	礫・炭化粒が見じる。
4	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	中・小礫が見じる。
5	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	中・小礫が見じる。
6	明黄褐色 (10YR6/6)	砂質シルト	7層の土が斑状に見じる。小礫を多く含む。
7	褐色 (7.5YR4/4)	砂質シルト	中・小礫が見じる。ややしまりあり。
8	褐色 (7.5YR4/6)	砂質シルト	中・小礫と7層の土が見じる。ややしまりあり。
9	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	ローム・ブロック・小礫が見じる。
9′	褐色 (7.5YR4/4)	砂質シルト	中・小礫が多く見じる。粘性ややあり。

SB06-P4.5.6断面



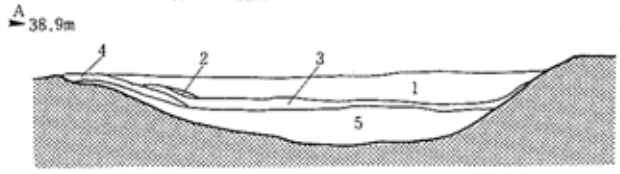
層No.	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物を少量含む。
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を多く含み、地山粒を若干含む。

SA01-P1断面



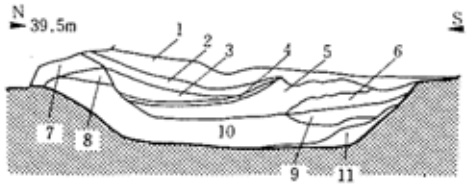
層No.	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒・小礫を含む。しまりあり。
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒・炭化物・焼土を含む。しまりあり。

SD07断面



層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む。整地層。
2	褐色 (10YR4/6)	砂質土	
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土	
4	褐色 (10YR4/6)	砂質土	
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロックを少量含む。

SD08断面



層No.	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒を少量含む。
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	
3	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山粒を斑状に含む。
4	褐色 (10YR4/4)	粘土	
5	明黄褐色 (10YR6/6)	粘土	地山ブロックを含む。
6	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土	地山ブロックを少量含む。
7	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	細かな地山ブロックと炭化物を多く含む。
8	黄褐色 (10YR5/6)	粘土	
9	褐色 (10YR4/4)	粘土	大粒の地山ブロックを多く含む。
10	褐色 (10YR4/4)	粘土	
11	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土	

SD09断面

0　1m

第10図　掘立柱建物跡・柱穴列・溝跡断面図

～1.4m、深さは21㎝前後で暗褐色シルトが堆積している(第10図)。

ＳＤ05・06からは遺物が出土していないが、掘立柱建物跡との切り合い関係からみて近世以後の遺構と考えられる。ＳＤ07からは土師器の破片が出土しており近世の遺物はみられないため古代の遺構の可能性がある。

［ＳＤ08・09溝跡］　写真図版4

調査区東端の地山面上で検出された。ＳＤ08はＳＲ01炭窯跡にこわされており、整地Ⅲに覆われている。

ＳＤ09は整地Ⅲの下位にある赤褐色粘土層(第7図44層)と、後述するＳＲ01炭窯跡に関連する整地Ⅳに覆われており、ＳＤ08に切られている。従ってＳＤ09→ＳＤ08→ＳＲ01という新旧関係が成り立つが、ＳＲ01炭窯跡は後述するように近世以前と考えられる遺構であるため、これらの溝跡も近世以前に位置づけられる。

ＳＤ08は南東から北西にのび、幅1.6～2m、深さ8～36㎝で、褐色系のシルト・粘土等が堆積している。ＳＤ09は検出部が短いため方向は不明である。幅1.6～1.9m、深さ18～30㎝で、地山粒の混じる褐色系のシルト等が埋積している。

［ＳＤ10～16溝跡］

ＳＸ01池跡周辺で検出された。いずれの溝跡からも遺物は出土していない。

ＳＤ10は地山面上で検出した溝跡で、ＳＫ04・05土壙が埋められた後に構築されている。幅25～40㎝、深さ13～20㎝で、整地Ｉとみられるしまりのない黄褐色のシルトが堆積している。

ＳＤ11はＳＸ02池跡に切られる溝跡で、地山面上で検出した。ＳＸ01池跡方向に延びており、上幅50～70㎝、底面幅が10㎝前後、深さ6～31㎝で灰褐色シルトが埋積している。

ＳＤ12は整地Ⅱ上に掘り込まれた溝跡で、ＳＤ15に切られており、ＳＫ15に接続している。幅40㎝前後、深さ12～24㎝で褐色系の粘土やシルトが堆積している。

ＳＤ13は整地Ⅱ上に掘り込まれた溝で、ＳＫ14より新しい。上幅20～70㎝、底面幅15～20㎝、深さ41～43㎝で、炭化物や地山の崩壊土の混じる褐色系の砂質シルトないし粘土が堆積している。

ＳＤ14は整地Ⅱ上から掘り込まれた溝である。幅40～50㎝、深さ4～7㎝で褐色砂質シルトが埋積している。

ＳＤ15は整地Ⅱ上から掘り込まれた溝でＳＤ12・ＳＸ03通路状遺構より新しい。第1次調査Ａ－3区トレンチで一部検出されていたもので、検出部の南東端で屈折し北東へ延びるものと推定される。上幅3～3.5m、底面積1～1.5m、深さ60㎝～1.1mで褐色ないし黒褐色のシルトが堆積している(第11図、写真図版13)。

ＳＤ16は整地Ⅱ上から掘り込まれた溝で、第1次調査Ａ－2区トレンチの断面で確認されていたものである。ＳＫ19に切られており、幅80㎝以上、深さ27～30㎝で地山ブロックや焼土の混じる褐色の砂質シルト(第6図10層)が堆積している。

土　壙　(第11図～第14図、写真図版5～7)

土壙は計28基検出された。池跡1の周囲に多く分布している。

［ＳＫ01土壙］　写真図版5

調査区東端にあるＳＸ02池跡に切られる土壙で、地山面上で検出した。直径約2.3m、深さ約70㎝、褐灰色・明黄褐色の粘土・シルトが堆積している。堆積土中から近世磁器の小破片が出土している。

［ＳＫ02・05・18土壙］　写真図版6

調査区ほぼ中央、ＳＸ01池跡構南側の地山面上で重複して検出された土壙で、ＳＫ05→ＳＫ18→ＳＫ02の新旧関係がある。

ＳＫ02は直径約7.5m、深さ約55㎝の不整円形である。埋積土上層は整地Ⅰで下層に褐灰色・明黄褐色の粘土・シルト等が堆積している(第12図7～14層)。上層には瓦片などが含まれ、下層からは近世磁器が出土している。

ＳＫ05は長軸約4m、深さ約60㎝の不整円形で、ＳＫ02・18に切られている。地山ブロック・円礫・炭化物等の混じる褐灰色・灰黄褐色の粘土・シルト等が堆積しており(第12図21～30層)、最下層はグライ化している。堆積土中から近世磁器の破片が出土している。

ＳＫ18は深さ86㎝で規模は不明である。堆積土はにぶい黄褐色・褐灰色等の粘土・シルトである(第12図15～20層)。

これらの土壙からは近世陶磁器の破片がまとまって出土したが、当初1つの大形の土壙と考えて掘り下げたために帰属の不明な遺物が生じた。

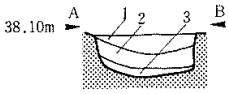
［ＳＫ06土壙］　写真図版8

ＳＸ04通路状遺構底面の側溝を切って掘り込まれている。直径1.2～1.3m、深さ90㎝前後の円形で・地山ブロックの混じる黄褐色系の粘土質シルトが堆積している。これは整地Ⅰとほぼ同じ特徴を持っており、本遺構は通路状遺構が埋まった後に掘り込まれ、整地Ⅰがなされるまで開口していた可能性が高い。

［ＳＫ08土壙］

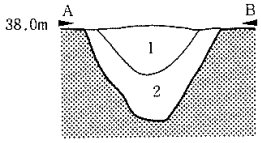
調査区北側の整地Ⅱ上で検出した。ＳＤ15溝跡・ＳＸ03通路状遺構より新しい土壙である。直径1.3m、深さ約70㎝の円形で、地山粒、炭化物等の混じる褐色系のシルトが堆積している。遺物は出土していない。

［ＳＫ10土壙］



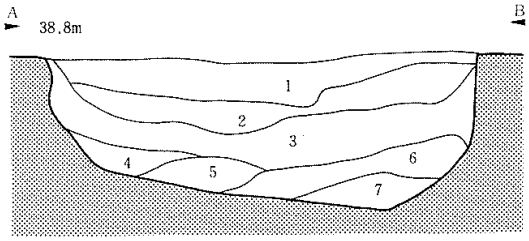
層No	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/6)	粘土	固くしまっている。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物を僅かに含む。硬くしまっている。
3	黄褐色 (10YR5/8)	粘土	地山崩壊土。

SD12断面



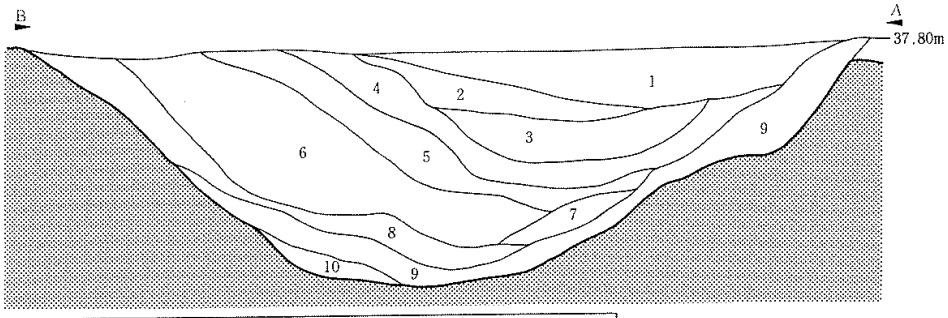
層No	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物を少量含む。
2	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土	地山粒を多く含む。酸化鉄の沈澱あり。

SD13断面

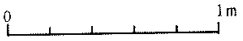


層No	土色	土性	備考
1	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	炭化物を少量含む。
2	褐灰色 (10YR5/1)	シルト	地山礫のブロック・砂粒を非常に多く含む。
3	褐灰色 (10YR5/1)	粘土	5cm大の礫を少し含む。
4	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土	
5	灰褐色 (10YR5/2)	粘土	
6	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	
7	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土	

SK01断面

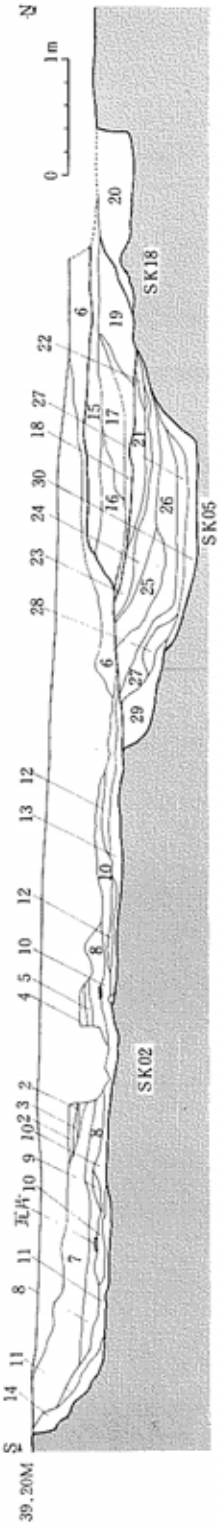


層No	土色	土性	備考
1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。
2	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。
3	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。
4	褐色(7.5YR4/4)	砂質シルト	大きい地山ブロックを多く含む。
5	褐色(10YR4/6)	シルト	しまりがない。
6	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。
7	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	炭化物・地山粒を若干含む。しまりあり。
8	褐色(10YR4/6)	シルト	他の土をあまり含まない。しまりあり。
9	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	地山粒を含む。しまりあり。一部グライ化している。
10	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	地山粒を含む。しまりあり。一部グライ化している。



SD15断面

第11図　溝跡・土壙断面図



層No	土色	土性	備考
1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	礫・瓦片を多く含む。
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	
3	明黄褐色 (10YR7/6)	砂質土	
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	
6	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	粘性が強く、下部はグライ化している。整地Ⅰ。
7	褐色 (10YR4/6)	シルト	SK02埋土。
8	褐色 (10YR4/4)	シルト	SK02埋土。
9	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	砂粒を多く含む。SK02埋土。
10	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	炭化物を少量含む。グライ化している。SK02埋土。
11	褐灰色 (10YR5/1)	粘土	グライ化が進んでいる。SK02埋土。
12	褐灰色 (10YR6/1)	粘土	上部に炭化物が広がる。SK02埋土。
13	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土	SK02埋土。
14	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	地山ブロックを含む。SK02埋土。
15	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	SK18埋土。
16	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	地山ブロックを含む。SK18埋土。
17	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。SK18埋土。
18	褐灰色 (10YR5/1)	粘土	グライ化している。SK18埋土。
19	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	地山礫を多く含む。SK18埋土。
20	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	シルト	地山ブロックを含む。SK18埋土。
21	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	地山礫・砂を多量に含む。整地Ⅱ？
22	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土	SK05埋土。
23	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土	炭化物を少量含む。SK05埋土。
24	褐灰色 (10YR5/1)	粘土	炭化物を多く含む。SK05埋土。
25	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	24層に類似している。SK05埋土。
26	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土	24層に類似している。SK05埋土。
27	黄褐色 (10YR5/3)	粘土	砂粒・1cm大の円礫を含む。SK05埋土。
28	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土	1cm大の円礫を含む。SK05埋土。
29	オリーブ黄色 (5Y6/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む。SK05埋土。
30	黄色 (2.5Y6/8)	シルト	地山ブロックを多量に含む。SK05埋土。

第12図　土壌断面図

ＳＸ01池跡の南西岸に残存していた整地Ⅱ、および地山面上で検出した。長軸約2m（推定）、深さ60cmの楕円形で、埋積土には地山ブロック、礫、炭化物等が混じっている。近世磁器の小破片が出土している。

［ＳＫ11土壙］

ＳＸ01池跡南側の地山面上で検出された。深さ約50cmで、約半分が削平されている。地山ブロックや炭化物の混じる黄褐色系のシルトとロームが埋積しており、2層から摺鉢の破片が出土している。

［ＳＫ13土壙］　写真図版7

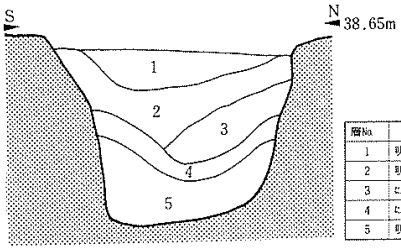
ＳＸ01池跡東側の地山面上で検出された。直径1.8m、深さ30cmの不整円形で、礫や地山粒の混じる褐色系のシルトが埋積している。埋積土中から瓦・磁器の破片が出土している。

［ＳＫ14土壙］

調査区東端の地山面上で検出されたが、削平した部分は整地Ⅲを掘り込んでいる。ＳＤ05溝跡より古い。検出部は深さ約40cmで褐色系の粘土が埋積している。遺物は出土していない。

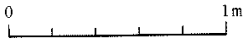
［ＳＫ17土壙］

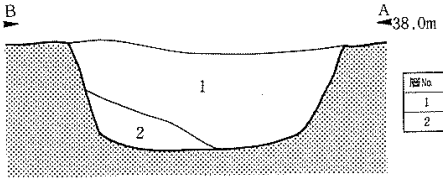
ＳＸ01池跡東側の整地Ⅱ上で検出され、ＳＫ15を切っている。長軸3.7m、深さ45cmの不整円形で、小礫や炭化物の混じる褐色系のシル



層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	明黄褐色　(10YR6/6)	粘土質シルト	地山の凝灰岩小ブロックを少量含む。
2	明黄褐色　(10YR7/6)	粘土質シルト	地山の凝灰岩小ブロックを少量含むが、1層より少ない。
3	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	粘土質シルト	地山の凝灰岩小ブロックを多く含む。地山粒を多く含む。
4	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	粘土質シルト	地山の中ブロックを層状に含む。
5	明黄褐色　(10YR6/6)	粘土質シルト	径0.5～1.0cmの地山ブロックを斑状に含む。

SK06断面





層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	褐　　色(10YR4/6)	シ　ル　ト	地山粒を多く含む。炭化物を少量含む。しまりなし。
2	黄褐色　(10YR5/6)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。1層よりしまりあり。

SK08断面

第13図　土壙断面図

トが堆積している。遺物は出土していない。

［ＳＫ24土壙］

ＳＸ01池跡の南西側の地山面上で検出された。高校の便槽により破壊されているため規模は不明で、検出部の深さは約40㎝である。炭化物の混じる褐色系のシルトが埋積している。遺物は出土していない。

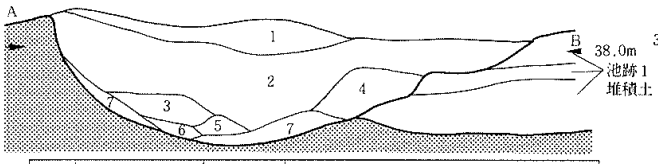
池　跡　(第9図、第15図)

池跡は2か所検出された。

［ＳＸ01池跡］　写真図版7

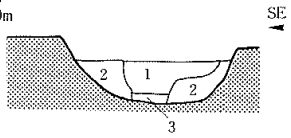
1区中央やや北寄りで検出し、西端の一部は第1次調査Ａ－2区で検出されている。第1次調査の項で述べたように整地層Ⅱ上で落ち込み部を検出した。南側にはテラス状の段がみられる。長軸約22m、深さ約60㎝で東辺の一部が岬状に内側に張り出す不整円形状を呈する。堆積土は上層が整地Ⅰ(第15図1～6層)で、7層以下が自然堆積層である。また古い段階のものと考えられる堆積土が検出した岸の外側の断面で確認されているため(第15図15～18層)、池は後に埋立てて狭くされていることがわかる。この状況は第1次調査でも確認されている。底面は浅い窪みがあって平坦ではなく、中央部に円礫が集積された部分が認められる。

堆積土の各層から近世～近代の陶磁器や瓦の破片が出土しており、底面付近からは大堀相馬焼の土瓶や瓦質・土師質の手あぶり等が出土している。



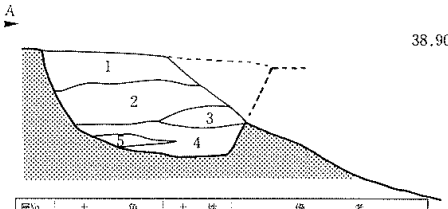
層No	土色	土性	備考
1	明黄褐色 (7.5YR5/6)	シルト	地山ブロック多くを含む。
2	褐色 (10YR4/6)	シルト	礫・炭化物を少量含む。
3	褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を少量含む。
4	にぶい黄褐色 (7.5YR5/3)	シルト	地山粒・炭化物粒を少量含む。下部はグライ化している。
5	灰白色 (7.5Y7/2)	粘土	
6	黒色 (10YR2/1)	シルト	腐植土か？
7	灰褐色 (7.5YR4/2)	粘土	

SK10断面



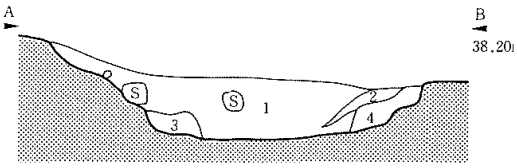
層No	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	凝灰岩を含む。
2	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	ロームブロックが要じる。
3	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	ロームブロックと凝灰岩の粒子が混じる。

SX03通路状遺構　ピットH断面



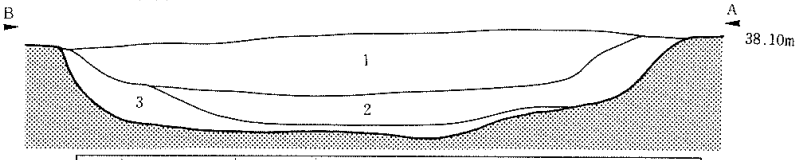
層No	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	ローム	炭化物・黄色ロームの混じる汚れた土。
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物・黄褐色ロームブロックが混じる。
3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	比較的均質で、小礫を含む。
4	黄褐色 (10YR5/6)	シルト質粘土	炭化物が炭じる。3層より粘性あり。
5	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト質粘土	炭化物が混じる。

SK11断面



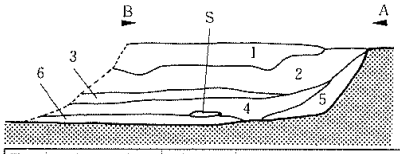
層No	土色	土性	備考
1	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	礫・ロームが混じる不均質な土。
2	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	ロームが混じる。一部グライ化している。
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	
4	褐色 (7.5YR4/4)	砂質シルト	比較的均質である。

SK13断面



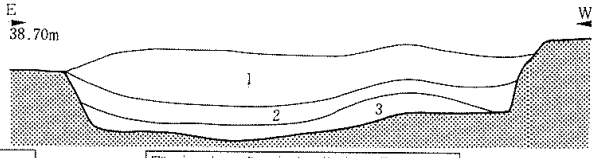
層No	土色	土性	備考
1	黄褐色 (10YR5/8)	粘土	小礫を含み、部分的に暗褐色土を含む。地山に非常に近い。人為的埋土。
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物を僅かに含む。地山粒が混在し、小礫も微量に混在する。
3	黄褐色 (10YR5/8)	粘土	地山崩壊土。

SK17断面



層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (7.5YR3/4)	粘土	炭化物を多量に含む。地山粒を少量含む。
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土	炭化物・地山粒を若干含む。
3	灰黄褐色 (10YR6/2)	粘土	炭化物・地山粒を若干含む。
4	明褐灰色 (7.5YR7/1)	粘土	炭化物・地山粒・砂を含む。
5	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	粘土	炭化物を含まない。
6	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	粘土	炭化物を含まない。

SK14断面



層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物を多く含む。
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒を多く含む。
3	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	グライ化が進んでいる。

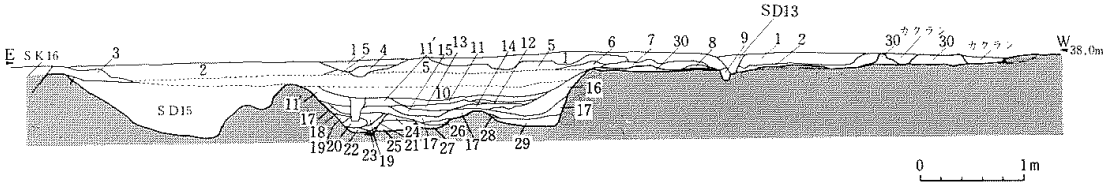
SK24断面

0　1m

第14図　土壙・通跡状遺構柱穴断面図

層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/6)	シルト	盛土。整地Ⅱ。	10	明黄褐色 (7.5YR5/6)	シルト	粘性あり。非常にしまりあり。池跡（新）の立上り部。
2	明黄褐色 (7.5YR5/8)	シルト	盛土。整地Ⅱ。	11	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	池跡（旧）の埋め立て土。
3	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。盛土。整地Ⅰ。	12	明黄褐色 (7.5YR5/6)	シルト	炭化物を少量含む。粘性あり。グライ化した層を挟む。
4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロックを多く含む。粘性あり。盛土。整地Ⅰ。	13	明褐色 (7.5YR5/8)	シルト	
5	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山ブロックを多く含む。盛土。整地Ⅰ。	14	橙色 (7.5YR6/6)	シルト	上面にマンガン粒を多く含む。グライ化した層を挟む。
6	褐色 (10YR4/4)	シルト	硬くしまっている。池跡（新）の立上り部。	15	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山ブロックを多く含む。池跡（旧）堆積土。
7	褐灰色 (10YR5/1)	粘土	炭化物を多く含む。池跡（新）堆積土。	16	橙色 (7.5YR6/6)	シルト	粘性あり。しまりあり。池跡（旧）の岸。
8	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	マンガン粒を多く含む。粘性あり。池跡（新）堆積土。	17	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	炭化物を僅かに含む。池跡（旧）堆積土。
9	橙色 (7.5YR6/6)	シルト	地跡（旧）の埋め立て土。	18	橙色 (7.5YR6/6)	シルト	粘性あり。上面は粘土質である。池跡（旧）堆積土。

第15図　ＳＸ01池跡断面図



層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
1	明黄褐色 (7.5YR5/8)	粘土質シルト	炭化物・旧表土が帯状に入る。凝灰岩小礫を含む。整地Ⅱ。	16	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	旧表土の二次堆積土。
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物・旧表土・凝灰岩の小礫が帯状に入る。整地Ⅱ。	17	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロック多く含む。粘性あり。
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物・地山ブロックを含む。ＳＤ15堆積土。	18	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を含む。粘性あり。ややしまりあり。
4	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物・凝灰岩小礫を含む。整地Ⅱ。	19	黄褐色 (10YR5/8)	砂質シルト	暗褐色土を僅かに含む。粘性あり、しまりなし。
5	褐色 (10YR4/6)	シルト	炭化物・凝灰岩小礫・地山ブロックを含む。整地Ⅱ。	20	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を若干含む。粘性あり。ややしまりあり。
6	黄褐色 (10YR5/8)	粘土	凝灰岩小礫を含む。整地Ⅱ。	21	黄褐色 (10YR5/8)	シルト	礫を含む。粘性あり。しまりなし。
7	明黄褐色 (7.5YR5/6)	粘土	炭化物を含む。旧表土。	22	褐色 (10YR4/4)	シルト	砂粒を含む。粘性あり。しまりなし。
8	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物・地山ブロックを含む。旧表土。	23	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を含む。やや粘性あり。しまりなし。
9	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物・凝灰岩小礫を含む。ＳＤ13堆積土。	24	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	礫を含む。粘性あり。ややしまりあり。
10	明黄褐色 (7.5YR5/6)	ローム	ロームブロック・凝灰岩小礫を含む。しまりなし。	25	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山の二次堆積土。
11	にぶい黄褐色(7.5YR5/3)	シルト	汚れが多い。	26	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小礫を含む。粘性あり。しまりなし。
11'	にぶい黄褐色(7.5YR5/3)	シルト	炭化物・地山粒を含む。	27	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山の小ブロックを含む。粘性あり。しまりなし。
12	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山粒を僅かに含む。	28	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	やや粘性あり。地山粒を含まない。
13	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	小礫を含む。粘性なし。しまりあり。	29	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック・黒褐色土を含む。粘性あり。
14	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	炭化物・地山ブロック・凝灰岩小礫を含む。	30	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	旧表土。
15	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多く含み、炭化物を僅かに含む。粘性あり。				

第16図　ＳＸ03通路状遺構断面図

［ＳＸ02池跡］

ＳＸ01池跡南東の地山面上で検出し、約1/2を発掘した。長軸約25mで、深さ30～40㎝の浅い部分と1.6m以上の深い部分があり、浅い部分は学校内にあった池であることが判明しているが深い部分の性格は不明である。浅い部分はごく最近埋められており、深い部分にはグライ化した粘土層が堆積している。深い部分では堆積土の上層から近世～近代の陶磁器片、下層から近世の陶磁器片が出土している。浅い部分では遺物は出土していない。

通路状遺構　(第16図、第17図、写真図版7・8)

［ＳＸ03通路状遺構］　写真図版7

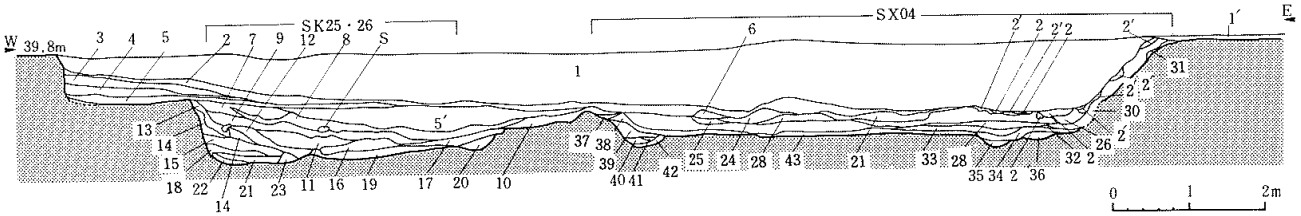
ＳＸ01池跡の北東で検出された。整地Ⅱの下位にある旧表土から掘り込まれており(第16図7層上面)、ＳＤ15溝跡、ＳＫ08・09土壙より古い。また西辺の一部が土壙状の落ち込みによって壊されている。

幅3.5～4.5m、深さ20㎝～1.2mの北へ傾斜する溝状の掘り込みの底面に、長軸60～70㎝、深さ5～30㎝の柱穴と思われるピットが2列計18個検出された。ピットには一部重複があり、柱の立て替えがなされていることがわかる。柱間は東側柱列南端から1.3m-1.2m-1.5m-0.7m-1.6m-0.8m-0.9mで、東西柱列の間隔は1.4～1.6mである。ピットには栓抜き取り痕を持つものがあり褐色ないし暗褐色の粘土・シルトが堆積している。また溝状部分には褐色系のシルト・粘土質シルトなどが埋積している。

［ＳＸ04通路状遺構］　写真図版8

調査区西側の地山面上で検出された溝状を呈する遺構で、南東～北西方向にのびると推定されるがＣ－3区では検出されなかった。校地拡張の際になされたと思われる厚さ10㎝程の整地層(整地Ⅰ')下で検出された。幅8.2m、深さ1.25mで、東辺の立ち上がり部には段状の部分がある。西辺は削平をうけており、高さ35㎝程の立ち上がりが残存している。堆積土の上部は整地Ⅰで、下部は小礫・炭化物が混じる黄褐色・褐色のシルトまたはロームである。底面両端には幅50～80㎝、深さ2～7㎝程の側溝が平行して2条掘り込まれており、1条はＳＫ06土壙に切られている。また断面の観察によれば3回の掘り直しが行われている(第17図33～35層)。

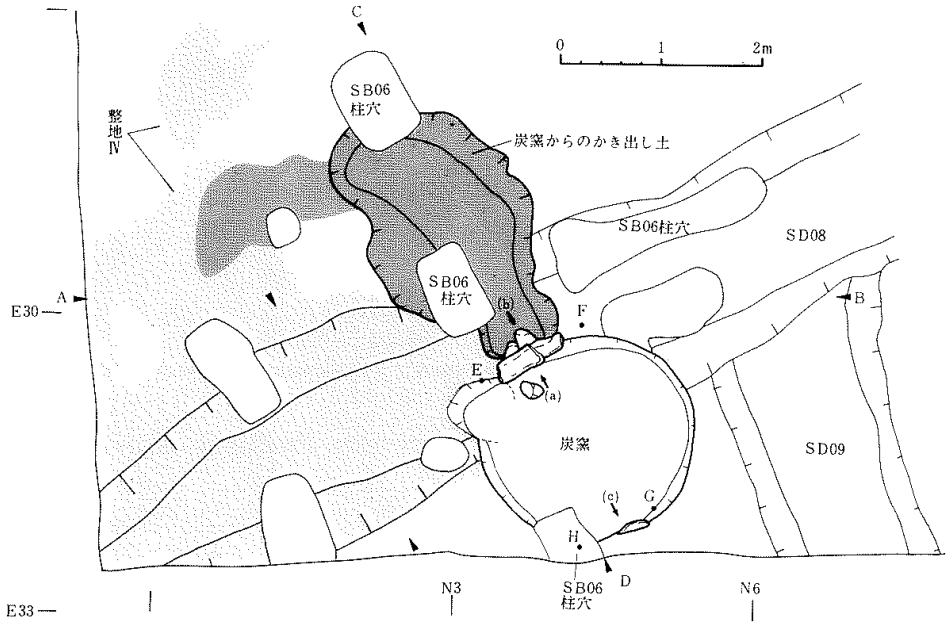
本遺構から遺物は出土していない。また本遺構より東では表土の直下で地山面が露出し、遺構・遺物とも発見されなかった。

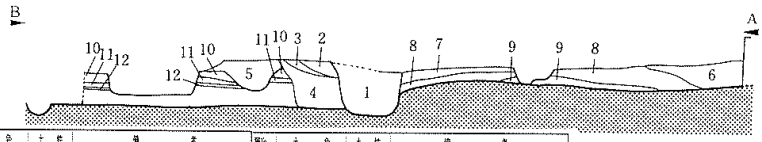


層No	土色	土性	備考
1	浅黄色 (2.5Y7/4)	粘土	ロームブロック砕石等まじる盛土。整地し。
1′	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	しまりあり。礫まじり不均質。
2	黄灰色 (2.5Y5/1)	砂質シルト	グライ化している。
2′	黄灰色 (2.5Y6/1)	砂質シルト	グライ化している。粘性ややあり。
3	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	しまりあり。
4	黄褐色 (5YR4/1)	砂質シルト	しまりあり。
5	明黄褐色 (10YR6/6)	砂質シルト	しまりあり。砂・小礫まじり不均質。
5′	黄褐色 (10YR5/6)	ローム	粘性。しまりあり。小礫まじり不均質。
6	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	しまりなし。
7	黄褐色 (10YR5/6)	ローム	小礫まじる。土壌理土。
8	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	しまりあり。ローム。小ブロック。小礫まじり不均質。土壌理土。
9	明黄褐色 (10YR6/6)	砂質シルト	砂質のブロックが斑状にまじり不均質。土壌理土。
10	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	ローム粒。まじる。一部しまりあり。土壌理土。
11	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	12層類似のブロックまじる。しまりなし。土壌理土。
12	黄褐色 (10YR5/8)	砂質シルト	ややしまりあり。土壌理土。
13	黄褐色 (10YR5/6)	ローム	しまりあり。小礫まじる。土壌理土。
14	黄橙色 (10YR8/8)	ローム	しまりなし。ブロック状の地山崩壊土。土壌理土。
15	黄褐色 (10YR5/8)	砂質シルト	しまりなし。12層と類似。土壌理土。
16	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	しまりなし。ロームの小ブロック。小礫がまじり不均質。土壌理土。
17	灰黄褐色 (10YR5/2)	砂質シルト	しまりなし。粘性あり。ロームの小粒まじる。グライ化している。土壌理土。
18	黄橙色 (10YR8/8)	ローム	14層とほぼ同一。土壌理土。
19	明黄褐色 (10YR6/6)	砂質シルト	ややしまりあり。小礫まじる。土壌理土。
20	黄褐色 (10YR5/8)	ローム	地山ロームの小粒子まじる。しまりあり。土壌理土。
21	明黄褐色 (10YR6/8)	粘土	粘性あり。しまりなし。土壌理土。
22	明黄褐色 (10YR6/6)	粘土	マンガン粒？まじる。粘性あり。しまりなし。土壌理土。
23			14層のブロック。
24			2層と同一。
25	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	しまりあり。ロームの小粒子まじる。
26	褐色 (7.5YR4/4)	砂質シルト	しまりなし。比較的均質。炭化物粒子まじる。
27	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	しまりなし。やや均質。小礫まじる。
28	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	しまりあり。不均質。
29	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	しまりあり。小礫・炭化物粒子まじる。
30	明黄褐色 (10YR6/8)	ローム	しまりあり。小礫まじる。満土。
31	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	しまりあり。30層まじる。
32	明黄褐色 (10YR6/6)	ローム	しまりあり。小礫まじる。
33	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	しまりあり。不均質。
34	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	しまりあり。33層より粘性あり。側溝堆積土。
35	黄褐色 (2.5Y5/3)	粘土	しまりなし。不均質。側溝堆積土。
36	黄褐色 (2.5Y5/3)	粘土	35層より均質。側溝堆積土。
37	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	しまりあり。小礫まじる。
38	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	炭化物小粒子まじる。下部で地山層がまじる。
39	黄褐色 (10YR5/6)	ローム	小礫まじる。側溝堆積土。
40	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	しまりなく均質。側溝堆積土。
41	褐色 (10YR4/4)	ローム	30，40層が混じったもの不均質。側溝堆積土。
42	黄褐色 (10YR5/6)	粘土	砂っぽい。側溝堆積土。
43	明黄褐色 (10YR6/6)	粘土	小礫まじる。通路状遺構盛土。

第17図　ＳＸ04通路状遺構

第17図　ＳＸ04通路状遺溝断面図

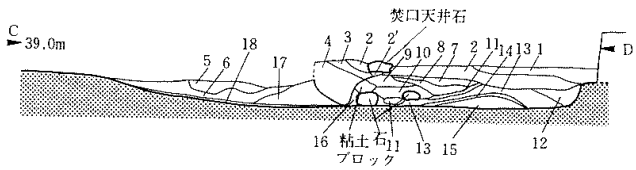




層No	土色	土性	備考
1	10YR黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	地山粒・炭化物粒を含む。SB06柱穴埋土
2	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山粒・炭化物を微かに含む。しまりあり。炭窯前庭埋土
3	10YR黄褐色(7.5YR5/4)	シルト	地山粒・炭化物を少量含む。炭窯前庭埋土
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒・炭化物粒を含む。炭窯前庭埋土
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を含む。ピット埋土
6	暗褐色(10YR3/4)	シルト質粘土	地山粒・炭化物粒を多く含む。整地層
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒・炭化物粒を含む。整地層

層No	土色	土性	備考
8	10YR黄褐色(10YR5/4)	シルト質粘土	地山粒を多量に含む。整地層
9	褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	地山粒を含まない。整地層
10	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	地山粒を多量に含み、黒褐色土を少量含む。整地層
11	褐色(10YR4/6)	砂質土	地山粒・炭化物粒を含まない。SD08埋土
12	10YR黄褐色(10YR5/3)	粘土	11層の土を部分的に少量含む。SD08埋土
13	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を少量含む。SD08埋土

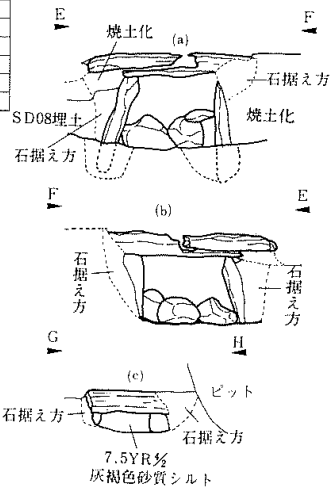
A－B断面



層No	土色	土性	備考
1	10YR黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒・炭化物を若干含む。整地層
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土	地山粒を多く含む。整地層
2'	褐色(10YR4/4)	粘土	地の土が焼けらない。生間部への変入土か。
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土・炭化物を少量含む。被熱している。ピット埋土
4	褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	焼土・炭化物を含む。地山粒を多量に含む。ピット埋土
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト質粘土	地山粒・炭化物を多量に含む。前庭部埋土
5'	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土	炭化物多い。地山粒・焼土を少量含む。前庭部埋土
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土	炭化物を多量に含む。炭化室埋土
8	赤褐色(10YR4/8)	シルト質粘土	被熱している。炭化室埋土
9	褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	焼土・炭化物を微かに含む。地山粒多い。炭化室埋土

層No	土色	土性	備考
10	褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	焼土・炭化物を多く含む。炭化室埋土
11	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	焼土を含む。炭化室埋土
12	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	焼土を含む。炭化室埋土
13	赤褐色(10YR5/8)	シルト質粘土	被熱している。炭化室埋土
14	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	炭化物を多量に含む。炭化室埋土
15	赤褐色(10YR5/8)	シルト質粘土	被熱している。炭化室埋土
16	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	焼土を含む。炭化室埋土
17	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土	地山粒・炭化物粒を多量に含む。焼土あり。前庭部埋土
18	炭化物層		地山の上に炭化物が部分的に広がる。前庭部埋土

C－D断面



0 1 2m

第18図　ＳＲ01炭窯跡

0 1m

炭窯跡　(第7図、第18図、写真図版8・9)

［ＳＲ01炭窯跡］

調査区の東端で検出された半地下式と思われる炭窯である。ＳＤ08・09より新しく、ＳＢ06・07より古い。構築面はＳＤ08の堆積土(第18図11～13層)上にある、地山粒を多量に含む層（第18図10層）である。この層はＳＤ08の外にも分布しているため、炭窯の構築に際してなされた小規模な整地層と考えられる(整地Ⅳ)。この整地Ⅳは炭窯周辺に限って、掘立柱建物構築に係わる整地Ⅲと区別することができた。

炭窯は炭化室、前庭部、煙道からなる。炭化室は長軸2.2m、短軸約2mの円形で西側に焚き口があり、窯壁が検出面から深さ15㎝ほど残存している。堆積土上層は掘立柱建物構築に係わる整地Ⅲで(第18図Ｃ-Ｄ断面1・2層)、下層に褐色系のシルト質粘土等が堆積している。検出部の壁と底面は地山層で、壁は熱のため赤変し固くしまっている。底面はほぼ水平で、炭化物粒子が散在する。

焚き口は板石を組み、幅35～40㎝、高さ34㎝、奥行き21㎝の方形の開口部を設けたものである。天井石を支える袖石は据え方を掘って固定されている。焚き口外側の底面上には閉塞用と思われる円礫が置かれている。

煙道部は焚き口の反対側に位置しており、一部検出した。焚き口と同様な構造で天井部に板石、袖石に自然石を用いて幅20㎝、高さ9㎝の開口部を設けている。

前庭部は焚き口の西に接しており、長軸2.8m、短軸1.7mの不整楕円形を呈する。底面はすり鉢状で、炭化物層が遺構外まで拡がっている。

炭化室底面から須恵器甕の胴部破片と土師器片が出土しており、本遺構は古代のものである可能性がある。

(4)出土遺物

第1次～第3次調査で出土した遺物には近世の瓦・陶磁器、近代の陶磁器、土師器、須恵器の破片等があり、平箱で約20箱分ある。第1次調査ではＡ－1区掘立柱建物跡群の柱穴埋め土の上部から近世の磁器破片がややまとまって出土している。Ａ－2区では整地Ｉの下部で瓦の破片が集積された部分が検出されたが、近世のものと学校校舎のものと思われる新しいものが混在しており、図化できる資料はなかった。このほかに池跡の堆積土から近世の磁器破片が出土している。第2次調査では溝跡の検出されたＢ－1区で、近世の磁器・瓦・摺鉢などの破片が少量出土しているが図示しなかった。第3次調査の出土遺物は最も多いが池跡1とその周辺の土壙からの出土が中心であり、掘立柱建物跡の柱穴からはほとんど出土していない。

以下では各調査の出土遺物の内容を概観する。

Ａ－1区　(第19図、写真図版10)

出土遺物は肥前産の染付磁器が主体である。

第19図1はピット77出土の皿破片で、細い線描きと濃(だ)み(塗りつぶし)によって花文が描かれている。

写真図版10-2は芙蓉手と呼ばれる花弁状の区画文が描かれた皿の破片で、ピット5堆積土の出土である。

第19図2は寿字鳳凰(ほうおう)文と呼ばれる模様が描かれる皿で、明末（17世紀前半）の磁器を模したものである。17世紀半ば頃の製品と考えられる。ピット71掘り方埋土の出土である。

写真図版10-4はピット2出土の厚手の大皿破片である。見込に花文が描かれていると考えられるが、線描きが太めで濃みの付け方が大まかであり、中国産である可能性もある。

写真図版10-5,6はＳＤ01堆積土と遺構確認面出土の別個体だが、同一意匠の文様が施される碗である。体部下部に線描きによる火炎文が巡り、内面には斜格子文と波状文が陽刻されている。この陽刻手法は17世紀後半のものとされている(大橋　1989)。

写真図版10-7は遺構確認面上出土の皿破片で、口縁部は輪花状に成型されると思われる。細い線描きと淡い青色の濃みによって花文がえがかれている。外面は唐草文である。

このほかピット9から灯明皿と思われる土師質土器が（第19図4）、ピット11から火鉢と考えられる陶器片が出土している（第19図3）。

図示したほかにピットや遺構確認面から近世の陶磁器片が出土している。

Ｃ－1区　(第20図～29図　写真図版10～17)

掘立柱建物跡の柱穴から出土した遺物に図化できる資料は含まれていないため、池跡1・2とＳＫ2・5・11土壙付近の出土遺物、遺構外出土の特徴的な遺物を示す。

[池跡1出土遺物]　第20～22図、写真図版10～12

磁器には肥前産のほかに、仙台領内の産である切込焼が含まれている。陶器には大堀相馬焼がみられる。

第20図1～3は飯茶碗である。1・2は口唇部がやや外反する端反(はぞり)碗と呼ばれる器形で、1820年代から幕末にかけて流行した器形である。切込焼の飯茶碗で、胎土は灰色の特徴的な色調を呈する。縦縞に草花文が描かれており、文様部の呉須は緑がかった発色をしている。

第20図3・写真図版10-11は口縁部が直線的に開き底面積が狭くなった広東(かんとん)碗と呼ばれる器形で、高台は他の器形の碗よりも高い。写真図版10-11は立桶草花(たちおけそうか)文がみとめられるがこの文様は切込焼の飯茶碗にもあり、両者の区別は困難である。文様は肥前産品の場合18世紀後半以降流行している。

写真図版10-17･18は丸碗と呼ばれる器形で、17は笹文が描かれ、見込は蛇の目釉ハギがな

されている。18はやや小型な碗で文様は清朝磁器の流行をとりいれた梵字文様である。肥前産品では18世紀後半に流行するとされ、東京都旧芝離宮庭園跡遺跡で類品が出土している(西田、大橋　1988)。

第20図4・5は湯呑茶碗である。4は18世紀後半～1810年代に湯呑茶碗の主流となるとされる丸碗で、口縁部はやや内傾しており呉須のにじみが目立つ。5は厚手の筒茶碗で、18世紀後半～1810年代に流行したとされる器形である。文様は呉須のにじみが目立つ。高台内面の装飾銘は、崩した「福」字と思われる。

第20図6～8は小杯である。6は磁器で内面の釉が白濁し、外面の唐草文は淡い青色に発色している。切込焼と思われる。7・8は産地不明の陶器である。

第21図は皿類その他である。1は灰色の胎土に紺色の呉須で山水文を描いた端反の皿で、外面に印判で紅葉文が押捺されている。この印判手と呼ばれる手法は17世紀末～18世紀中に特徴的なものである。類品が土壙から出土している（第25図4）。写真図版11-5・6は大皿の破片で、5は見込に花文、外面に七宝文があり、高台は櫛歯状の染付縦縞が巡る櫛高台と呼ばれるものである。これらの特徴は鍋島藩窯製品にみられるもので、時期は18世紀頃と考えられる。6は浅い大皿の破片である。このほか18世紀中葉から同世紀末にかけて大量生産された「くらわんか」皿や（2）、小皿(3)、蛇の目高台の皿（4）、型起こしの変形菊皿(5)・紅皿(5)がある。第21図7と第22図および写真図版12-1・2は大堀相馬焼である。第22図の土瓶は池跡1底面から出土したもので、蓋内面に「御廣間持用」の墨書がある。

8は瓦質の突起状不明品で、焼成は瓦とほとんど同じであるため、道具瓦の一部の可能性もある。9は和硯で、現在の岩手県東磐井郡東山町で産出した紫雲石（正法寺（しょうぼうじ）石の別名がある）と呼ばれる輝緑凝灰岩製である(植村　1980)。灰赤色(7.5R5/2)を呈する。

［池跡2出土遺物］　第23図、写真図版12

池跡2では学校内の池であった浅い部分からは遺物が出土せず、深い部分の上層で近世～近現代の磁器破片が、下層で近世の磁器片が出土している。

皿(第23図)のほかに、茶碗と思われる破片がある(写真図版12―5・6)。第23図1は「くらわんか」皿、2は口縁部が輪花状に成型されたもので花唐草文と手描きの五弁花文がみられる。2は18世紀のものであろう。写真図版12-5は伊達家の紋である「三引両（みつひきりょう）」が染め付けられている。

［土壙出土遺物］　第24図、第25図、写真図版12～14

ここで図化した資料は、池跡1南側のＳＫ02・05を中心とする部分の出土遺物である。当初、重複した土壙群を池状の大きな窪みと考えて掘り下げたため帰属の明らかでない遺物が若干量生じた。

第24図1・3・4、写真図版11-1は飯茶碗である。1は蝶文の丸碗で切込焼と考えられる。見込は蛇の目釉ハギである。写真図版11-1は「くらわんか」の丸碗で、やや大振りで厚手につくられている。3はやや小型の丸碗である。濃みを使わず線描きで笹文が描かれている。この手法は素描きと呼ばれ、19世紀に多く見られると言う。見込はヒョウタンと軍配の成物文である。高台は幅広に作られている。4はやや小型の丸碗である。色絵によって草花文が描かれており、圏線と花弁・装飾銘が赤、葉は緑と黄緑で絵付されている。

第24図2は大堀相馬焼の陶器碗である。筆描きで馬が描かれており、器体は貫入がある。第24図5・7〜9、は湯呑茶碗である。5は口唇部がやや端反となるもの、7・8はやや小形で口縁部が直立する深めの丸碗で、肥前産品では1820年代から現われる器形とされる。9は口縁部がやや端反りとなる小形のもので、口唇部に鉄釉が染め付けられている(口紅)。

第24図12・第25図1〜6は皿である。第24図12は見込に草花文と五弁花文、外面に唐草文が描かれた高級品で、高台内面の銘は「太明成化年製」であろう。第25図1〜3は陶器でやや深めに作られており、1・2が大堀相馬焼、3は肥前産の京焼風陶器と呼ばれるもので見込に鉄絵山水文が描かれている。高台は無釉で中央部に浅い円刻を施し、その周辺に押印がみられる点が特徴である。18世紀のものと思われ、類品が東京都立上野高等学校敷地内の東叡山寛永寺護刻国院旧墓地跡の寺院関係遺構から出土している（都立上野高等学校遺跡調査会1988）。

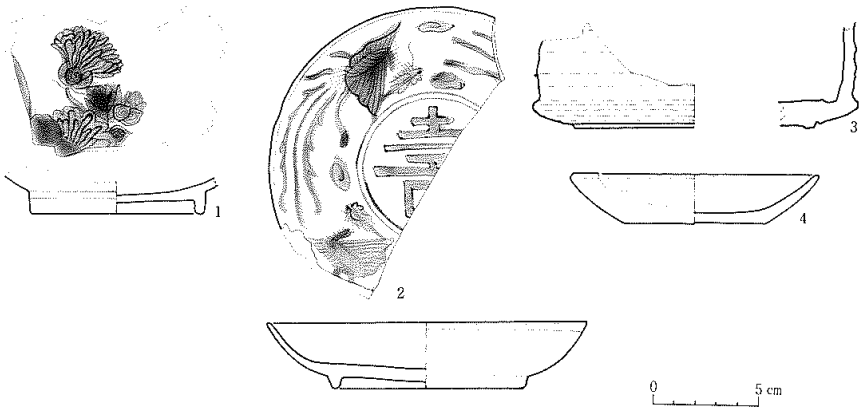
第26図は瓦質製品で、1は浅い鍋状と思われる製品の把手部、2は半円形の把手状を呈する不明品である。

［その他の出土遺物］　第27図〜第30図、写真図版14〜17

遺構確認面上出土、出土地点不明のものと各地点出土の瓦類、瓦質土器等を示した。第27図、第28図は皿、碗の蓋、水滴、灯明皿等である。磁器は肥前産ないし切込焼である。

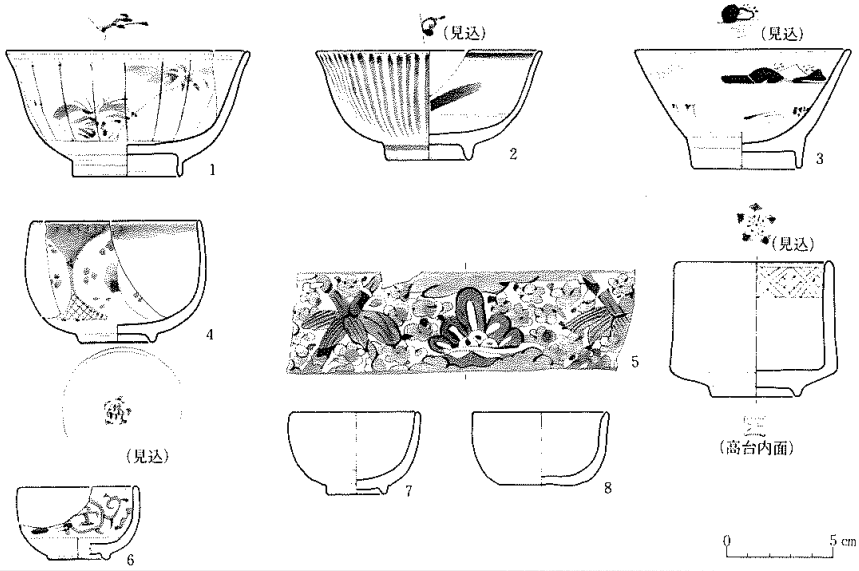
第29図、第30図は瓦類と瓦質・土師質土器である。伊達家の紋であるに「三引両」のある軒桟瓦・丸瓦や、茂庭家の紋である「重剣菱（かさねけんびし）」のある鳥伏間瓦・軒丸瓦などがみられる。

第30図2・3は池跡1から出土した手焙（あぶ）りである。1は瓦質で底部に短い3脚がつき、上部が燃焼部で下部が灰を落とす部分である。2は土師質の手焙りで燃焼部の底面には貫通孔がみられる。1は同じ部分が大きく開口しているので、燃焼部の底面には別部品が用いられたものであろう。



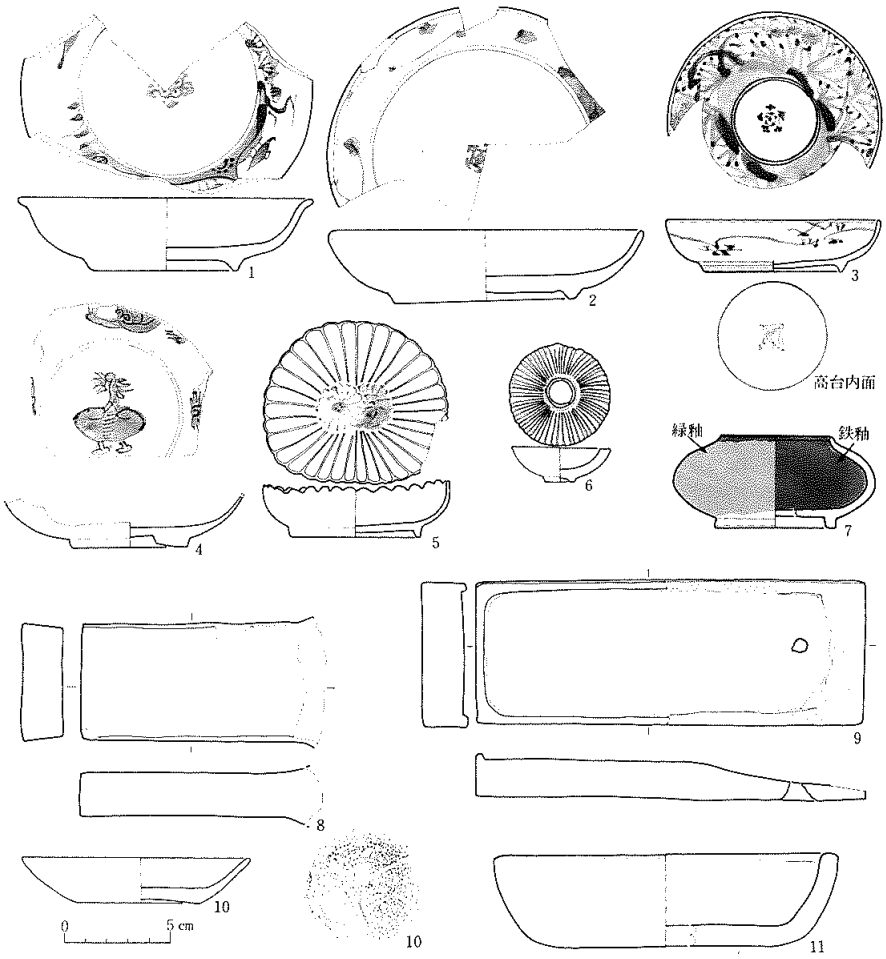
No	出土地点・層位	器　種	口径（底径）	高さ（残存部高）	産　地	特　　徴	写真図版
1	ピット７７－埋土中	皿	(高台径 8.1cm)	(2.5cm)	肥　前	陶器。染付花文。高台内面に目痕１個。染付圏線１本。	10－1
2	ピット７１－掘り方埋土	皿	14.7cm	3.1cm	肥　前	陶器。染付。寿字鳳凰文。	10－3
3	ピット１１－１層	火入れ	(15.0cm)	(4.8cm)	不　明	陶器。色調：灰白色(5Y8/2) 。貫入あり。	15－4
4	ピット０９－１層	灯明皿	11.5cm	2.4cm	不　明	土師質土器。口縁と内面の一部に黒色の付着物あり。	15－3

第19図　Ａ－１区出土遺物



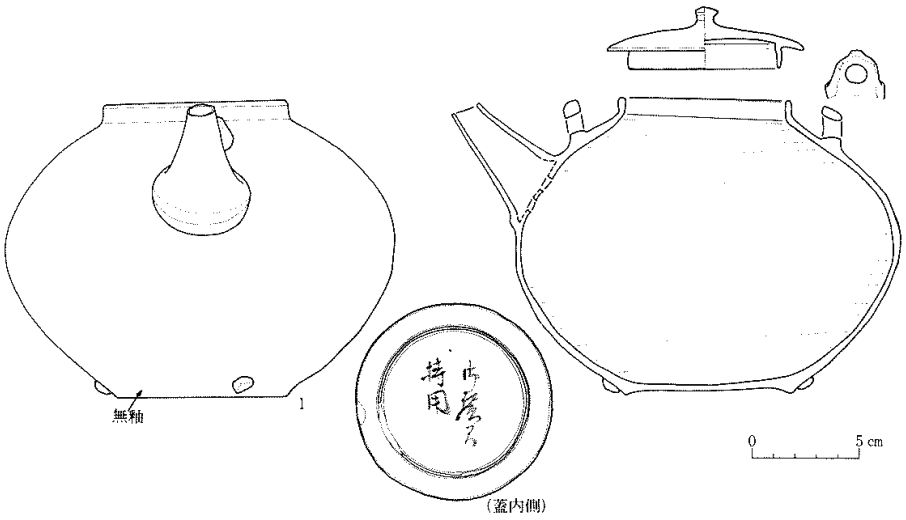
No	出土地点・層位	器　種	口径（底径）	高さ（残存部高）	産　地	特　　徴	写真図版
1	池跡１埋土中	飯茶碗	11.4cm	6.0 cm	切　込	組器。染付端反碗。縦縞に草花文。底面に染付圏線１本。見込に千鳥文。	10－8
2	池跡１不明	飯茶碗	10.6cm	5.2 cm	瀬戸？	染付端反碗。縦縞文。	10－9
3	池跡１不明	飯茶碗	10.1cm	5.6 cm	？	染付。広東型碗。磯浜文。見込は磯鳥文＋染付圏線。	10－10
4	池跡１不明	湯呑茶碗	8.0cm	5.6 cm	肥　前	染付。丸碗。見込は手描五弁花文。	10－12
5	池跡１不明	湯呑茶碗	7.4cm	6.4 cm	肥　前	染付。筒茶碗。松竹梅散孔文。口縁部の内側は四方襷文。高台部「角福」。 見込は圏線＋手描五弁花文。	10－13
6	池跡１埋土中	小杯	5.7cm	3.4 cm	切込？	染付。唐草＋草花文。口縁部は無釉。	10－14
7	池跡１埋土中	小杯	6.1cm	3.9cm	？	陶器。色調：灰白色(5Y7/2)	10－15
8	池跡１埋土中	小杯	6.4cm	3.4 cm	？	陶器。色調：灰白色(5Y7/2)	10－16

第20図　Ｃ－１区池跡１出土遺物（１）



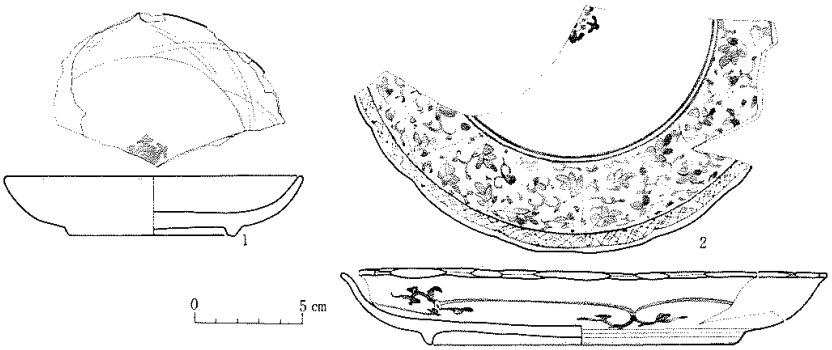
No	出土地点・層位	器種	口径（底径）	高さ（残存部高）	産地	特徴	写真図版
1	池跡1－8層	皿	13.1 cm	3.4cm	肥前	染付。色調：灰白色(7.5Y7/1)。山水文？見込に印判五弁花。外面に印判花文。高台内面に染付圏線。貫入あり。	11－1
2	池跡1－埋土	皿	14.7 cm	3.4cm	肥前	染付。菱唐草文。見込に五弁花。蛇ノ目釉ハギ。	11－2
3	池跡1－埋土	小皿	10.0 cm	2.4cm	肥前	染付。見込に草花文。外面に唐草文。高台内面に染付圏線＋「渦福」字。	11－3
4	池跡1－埋土	皿	高台径　5.2cm	（2.3cm）	？	染付。鳥獣文。高台が厚手。	11－4
5	池跡1－埋土	菊皿	8.5cm	2.5cm	切込？	型起こし。見込に花文。型の付高台。	11－7
6	池跡1－底面	紅皿	4.6cm	1.7cm	？	白磁。型起こし。	11－8
7	池跡1－埋土	油壺	5.1cm	4.3cm	大窯相馬	口縁部～内面に鉄釉。体部は緑釉、体下部は無釉。	11－10
8	池跡1－埋土	不明	（長辺11.3cm）短辺 5.5cm	厚さ　21mm	？	瓦質の不明品。	15－10
9	池跡1－埋土	硯	18.1 cm×6.5 cm	厚さ　4 ～ 20mm	陸中	集養石（正法寺石）製。輝緑凝灰岩。海部分が摩滅し穿孔されている。	15－12
10	池跡1～埋土	小皿	10.5 cm	2.1cm	？	土師質土器。	15－1
11	池跡1－埋土	鉢	16.0 cm	4.3cm	？	厚手の土師質土器。黒斑あり。	11－13

第21図　C－1区池跡1出土遺物（2）



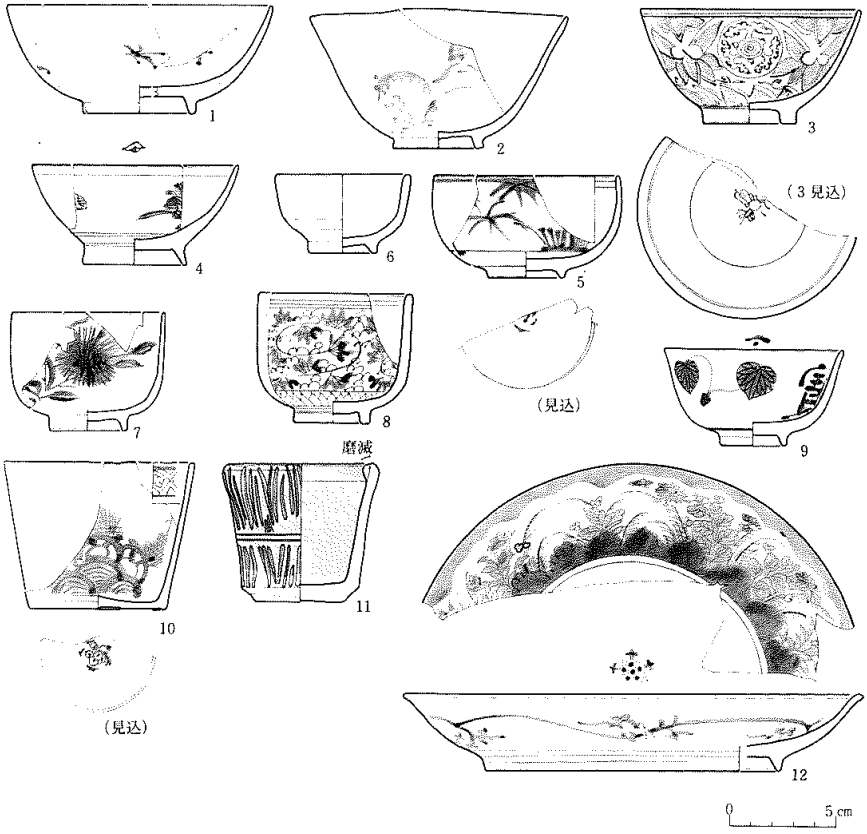
No	出土地点・層位	器種	口径（底径）	高さ（残存部高）	産地	特徴	写真図版
1	池跡1	土瓶	8.4cm	13.4cm	大堀相馬	陶器。色調：灰白色(10Y8/1)。茶漉し孔3孔。蓋内側に「御廣間持用」	11－15

第22図　C－1区池跡1出土遺物（3）



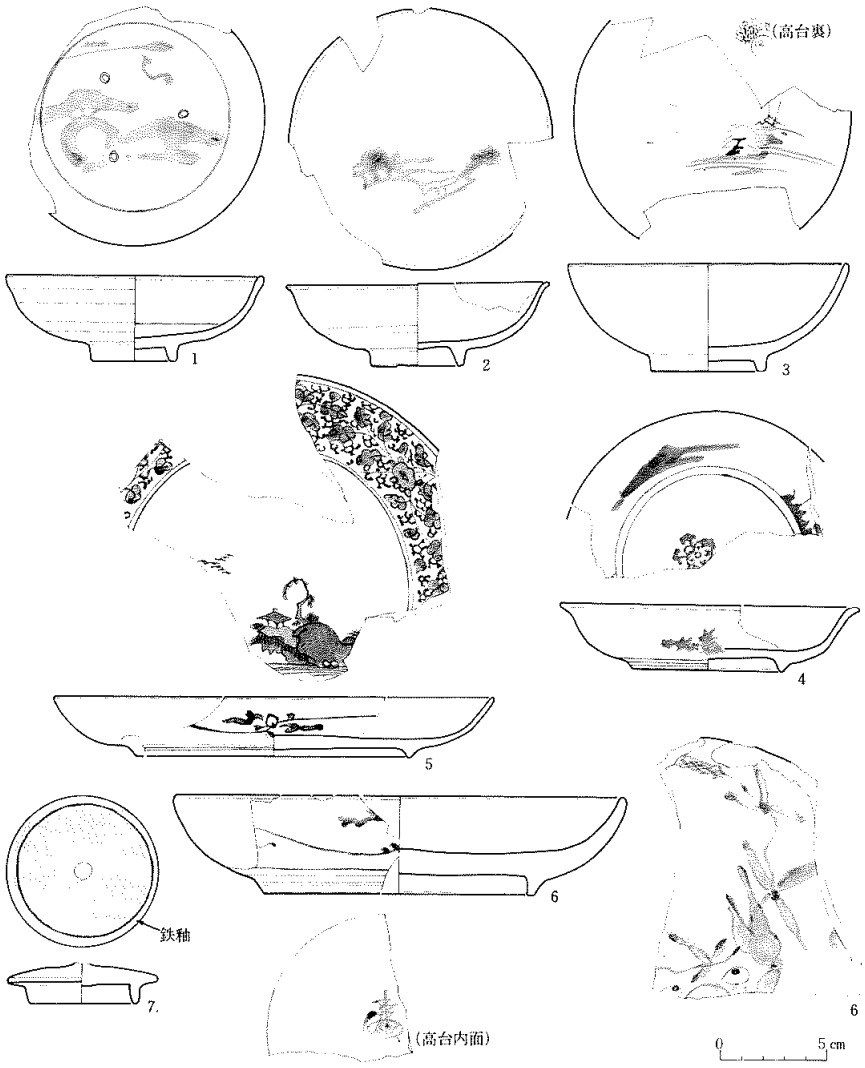
No	出土地点・層位	器種	口径（底径）	高さ（残存部高）	産地	特徴	写真図版
1	池跡2－2層	皿	13.7 cm	2.7 cm	肥前	染付。井桁文。見込に印判御井花。蛇ノ目釉ハギ。	12－4
2	池跡2－埋土中	皿	22.4 cm	3.3 cm	肥前	染付花唐草文。外面唐草文。高台内面に染付圏線＋太明（年）（製）ヘラ書2	12－7

第23図　C－1区池跡2出土遺物



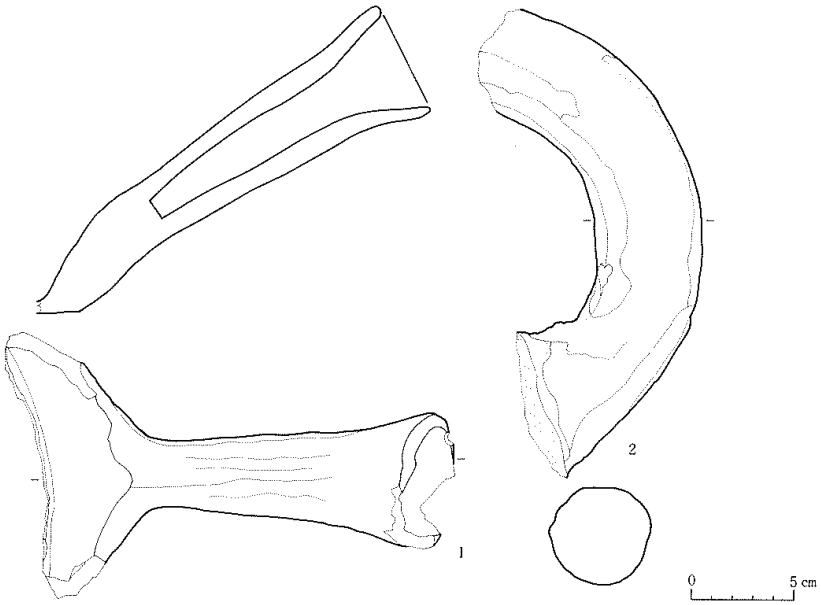
No.	出土地点	器　形	口　径（底　径）	高さ（残存部高）	産　地	特　徴	写真図版
1	SK02. 05付近	飯茶碗	12.5cm	5.1cm	切　込	丸碗。蝶文。蛇ノ目釉ハギ。	12−8
2	SK02埋土中	碗	12.1cm	6.5cm	大堀相馬	陶器。刷毛。色調：灰白色（7.5Y8/2）。文様は呉須染付。	12−9
3	SK02. 05付近	飯茶碗	10.2cm	5.4cm	肥　前	素描：草花文。見込に成物文。厚手の高台。	12−10
4	SK02. 05付近	飯茶碗	9.65cm	4.7cm		色絵。草花文。見込に千鳥文。	13−2
5	SK02. 05付近	湯呑茶碗	8.6cm	4.8cm	肥前？	丸碗。染付笹文。	13−3
6	SK02. 05付近	小杯	6.3cm	3.7cm	？	陶器。色調：灰白色（5Y7/2）	13−4
7	SK02. 05付近	湯呑茶碗	7.2cm	5.6cm	肥前？	染付草花文。貫入が顕著。	13−5
8	SK02. 05付近	湯呑茶碗	7.3cm	6.1cm	肥　前	染付花唐草文。	13−6
9	SK02. 05付近	湯呑茶碗	8.4cm	4.6cm	肥　前	染付。草花文＋「宝」字。口唇部口紅。	13−7
10	SK02. 05付近	猪口	8.9cm	6.9cm	肥　前	染付。口縁内面に四方襷文。見込に手描五弁花。	13−8
11	SK02. 05付近	灰吹き	6.8cm	5.5cm	？	陶器。釘彫りによる縦縞。底部付近は無釉。	13−9
12	SK02. 05付近	皿	21.6cm	3.6cm	肥　前	染付草花文。外面唐草文。見込は手描五弁花。高台内面「太明　化年　」	13−10

第24図　Ｃ－１区土壙出土遺物



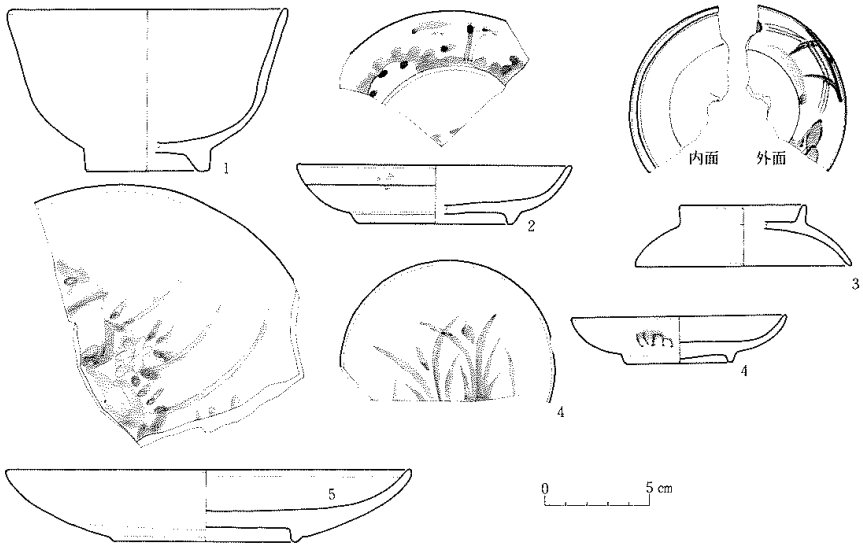
No	出土地点	器 形	口 径（底 径）	高さ（残存部高）	産 地	特 徴	写真図版
1	SK2 最下層	皿	12.0cm	4.0cm	大堤相馬	陶器。色調：灰白色(7.5Y8/2)。鉄絵山水文。見込に目痕３。	13－12
2	SK2 最下層	皿	12.2cm	3.4cm	大堤相馬	陶器。色調：灰白色(7.5Y8/2) 。鉄絵山水文。	14－1
3	SK05 下層	皿	13.1cm	5.0cm	肥 前	京焼風陶器。色調：淡黄色(5Y8/3) 。鉄絵山水文。	14－2
4	SK02.05付近	皿	14.0cm	3.2cm	肥 前	染付山水文。見込に印判五弁花。外面に印判紅葉。貫入あり。	14－4
5	SK02.05付近	皿	20.5cm	2.8cm	肥 前	染付花文。見込に山水文。外面唐草文。高台裏に目痕２。貫入あり。	14－3
6	SK02 2層	皿	21.1cm	4.6cm	肥 前	染付カニ文。外面唐草文。高台裏に「井」。厚手。	14－5
7	SK02.05付近	土師器	7.0cm	1.9cm		陶器。外面鉄釉。つまみ欠失。	14－7

第25図　Ｃ－１区土壙出土遺物（２）



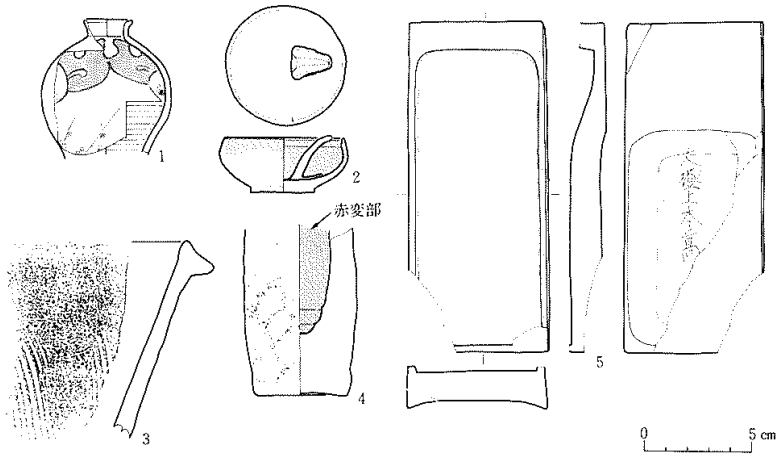
No	出土地点・層位	器形	口径（底径）	高さ（残存部高）	特徴	写真図版
1	SK02, 05付近	鍋？		（把手部 長さ19cm）	瓦質。把手部ナデ調整。	15－6
2	SK02, 05付近	不明			瓦質。表面ナデ調整。	15－13

第26図　C－1区土壙出土遺物（3）



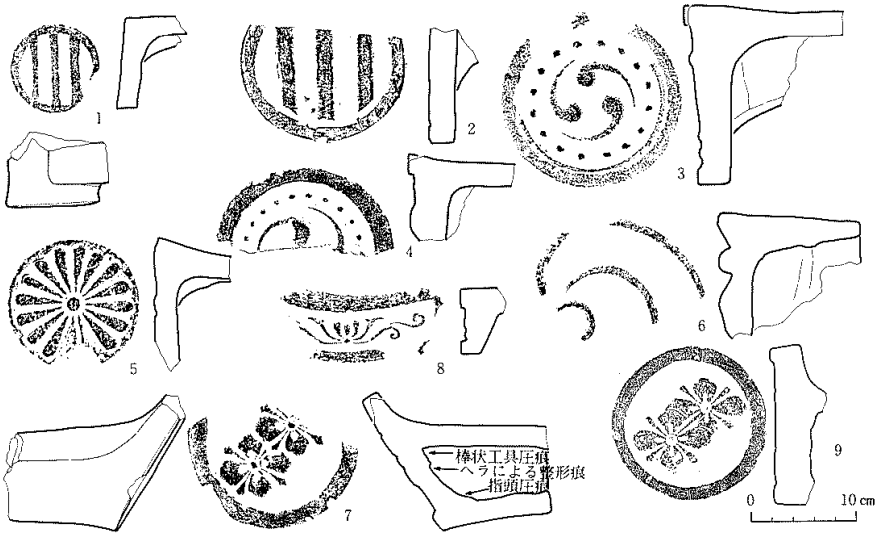
No	出土地点	器形	口径（底径）	高さ（残存部高）	底地	特徴	写真図版
1	池跡1北整地層上	碗	13.2cm	4.0cm	？	陶器。色調：灰白色(10Y8/1)	
2	盛土中	皿	13.0cm	3.9cm	肥前	染付。松竹梅文。見込は五弁花文か。	14－8
3	池跡1南側	碗の蓋	10.3cm	5.0cm	切込	染付。鳥居文。釉は一部白濁。	14－9
4	池跡1北整地層上	皿	10.2cm	3.2cm	切込	染付花文。外側に波氏窓。釉は白濁。	11－9
5	通路状遺構付近	皿	19.1cm	2.8cm	切込	染付花文。高台裏に染付圏線。	14－13

第27図　その他の出土遺物（1）



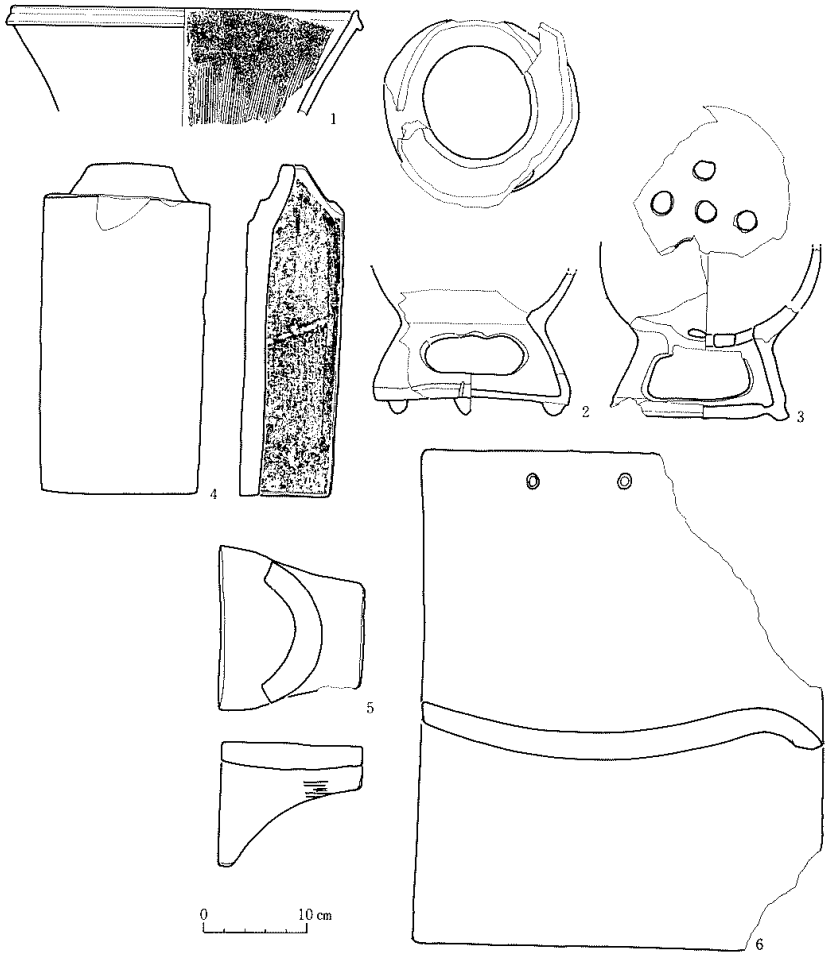
No	出土地点	器形	口径（底径）	高さ（残存部高）	産地	特徴	写真図版
1	SK02, 05周辺	御神酒徳利		（6.5cm）	肥前	染付赤絵。	14－10
2	SK02, 05周辺	灯心台	5.4cm	2.5cm	?	陶器。色調：淡黄色(5Y8/4)	14－12
3	SK02, 05周辺	擂鉢				陶器。鉄釉。	
4	池跡1埋土	不明	（4.1cm）	（7.9cm）		土師質。体部に格子目のタタキ。	15－5
5	通路状遺構付近	硯	15.2cm×6.2cm	厚さ 2cm		裏面凹部に「大極上本高」の文字。	15－11

第28図　その他の出土遺物（2）



No.	出土地点	種類		特徴	写真図版
1	池跡1底面	軒桟瓦	面径 8.2cm	瓦当部に「三引両」	16－3
2	SK02, 05付近	軒丸瓦	面径 15.4cm	瓦当部に「三引両」	15－9
3	SK02埋土上層	軒丸瓦	面径 17.0cm	三巴文	16－4
4	池跡2埋土上層	軒丸瓦	面径 17.0cm		
5	池跡1埋土中	軒丸瓦	面径 12.8cm	16弁	16－1
6	表採			渦文	16－2
7	池跡2埋土上層	鳥伏間瓦	面径 16.0cm	茂庭家家紋「重剣菱」文	16－5
8	池跡1底面	軒平瓦	厚さ 6.0cm	唐草文	16－6
9	池跡1埋土中	軒丸瓦	面径 15.0cm	「重剣菱」文	

第29図　その他の出土遺物（3）



No	出土地点	器　形	口径（底径）	高さ（残存部高）	特　　徴	写真図版
1	SK02.05付近	摺　鉢	32.5cm	（12.1cm）	陶器。内外面鉄釉。	17−3
2	池跡Ⅰ埋土中	手あぶり	（19.0cm）	（14.0cm）	瓦質。三脚付。	17−1
3	池跡Ⅰ埋土中	手あぶり	（17.0cm）	（16.6cm）	土師質。燃焼部貫通孔あり。	17−2
4	表採	丸　瓦	厚さ 32.0cm	幅 15.4cm	凸面に縦方向のナデ調節。凹面に縄圧痕。糸切痕。指頭圧痕。	16−8
5	SK02.05付近	棟込瓦	長さ 13.4cm	幅 10〜15.7cm	凸面に粗いナデ調節。凹面に布目。糸切痕。指頭圧痕。	16−9
6	SK02.05付近	桟　瓦	65.6 38.4cm	厚さ 2.6cm	凹面縦方向のナデ調節。釘穴2個残存。	

第30図　その他の出土遺物（4）

Ⅴ．考察

（1）遺跡の概要と年代

3次にわたる調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡10棟以上、柱穴列1列、打ち込み杭列1、溝跡16条、土壙28基、池跡2か所、通路状遺構2条、炭窯跡1基である。これらの遺構は検出状況と出土遺物に基づいて近世以前のものと近世の茂庭氏居館関係のものとに大別され、後者については遺構の重複や切り合いに基づいて数度の変遷が想定できる。

出土遺物には土師器、須恵器の破片、肥前産を中心とする近世陶磁器、近世の瓦、瓦質・土師質の土器、鉄製品、近・現代の磁器等があり、土師器、須恵器の破片は近世以前に位置づけられた少数の遺構から出土している。近世磁器の特徴によって示される年代幅は17世紀半ば頃～幕末で、寛永8年(1631)～明暦3年（1651）の「下屋敷」時代も含め上野館の存続年代に合致する。地点別に出土遺物の時期を見ると、Ａ－1区の掘立柱建物跡群からは第19図に示したように17世紀代の古い時期のものが出土しており、Ｃ－1区池跡1とその周辺の出土遺物は18世紀代～幕末のものが主体となっている。Ⅳ章でのべたように遺構面の多くの部分は削平を受け、原位置から動いている遺物が多いために個々の遺構の時期を詳しく知ることはできないが、検出された遺構の大半はこの年代幅のなかで変遷していると考えられる。

（2）館内建物の変遷と年代

館内の建物群のうちで最も新しく位置づけられるのは慕末期に存在していたもので、そのうち大正末年まで残っていた「奥」の建物の1棟は、現在の茂庭家当主である茂庭邦元氏の記憶によれば礎石立であった。これまで調査をおこなってきた部分は、幕末頃の建物配置を示した絵図によれば領内統治の政治および儀式の場としての「表」の部分で、表門を入って正面の「下ノ間」「中ノ間」「大広間」が連なる建物とその背後の「大書院」「中ノ間」「次ノ間」付近にあたっており、「大書院」等が連なる棟は居館内では藩主来訪時に使用する「御成書院」についで格式の高い場であった(佐藤　1979)。

このような性格をもつ幕末期の「表」の建物も「奥」と同様礎石立であった可能性が高いが、検出された建物跡はすべて掘立柱建物であり、さらに遺構確認面のほとんどが削平されていることから、上野館末期の礎石立建物跡は校地造成時に削平され、これより古い時期の掘立柱建物跡が残存したものと思われる。

次にこれらの古い段階の遺構の変遷について考えてみたい。重複と切り合い関係の検討によって第1表にＣ－1区における遺構の変遷を示した。Ａ－1区では検出部の掘立柱建物跡にＳＢ04→ＳＢ02→ＳＢ03という変遷がある。建物数はさらに多いことが予測されるため、実際には3段階以上変遷しているとみられるが、これらの建物跡の年代は上限・下限とも不明である。

	C－1区東側	池 跡 1 周 辺
近世以前 (古代?)	SD09→SD08→SR01 ↑ 整地Ⅵ	SX03通路状遺構, A－2区トレンチ溝 ↓ 整地Ⅱ
近世	SD07→SB06→SB08→SB09→SB05 →SB07 →SD06 ↑ 整地Ⅲ	SD14→SD16, SD13→SK28, SK15・SD12→SK17, SK08・09, ↓ SD15 SK02→SK18→SK05

第1表　C－1区における遺構の新旧関係

	棟 名	桁行×梁行	棟 方 向	総長(m)	面積 (m²)	備　　考
A区	SB01	1間以上×1間以上				
	SB02	3間以上×1間以上				
	SB03	4間以上×1間以上				
	SB04	2間×6間以上				東西棟建物の廊下か。
C区	SB05	5間×3間	南北棟(N-48° -E)	9.2×5.8	53.36	総柱、西桁行に入口か。
	SB06	7間×3間	南北棟(N-51° -E)	13.2×5.8	73.92	東桁行は6間割。間仕切りあり。
	SB07	5間以上×7間	南北棟(N-44° -E)			一間幅の廊下付き。一室は5間×2間分。
	SB08	3間×2間	東西棟(N-42° -W)	5.3×3.9	20.67	
	SB09	2間以上×1間	東西棟(N-41° -W)			
	SB10					

第2表　掘立柱建物跡一覧表

東側では整地Ⅲをおこなった後に掘立柱建物が建てられ、SB06→SB08→SB09→SB05という変遷を経ている。最も古く位置づけられるSB06の柱穴から近世の磁器片が出土しているので、上記の変遷は近世の年代幅のなかで生じたことが明らかであるが、SB06が「下屋敷」当時のものか正式な居館となった明暦3年(1657)以後に位置づけられるかは明らかでない。SB05も年代については不明である。SB07はSB06より新しいためSB08・09・05のいずれかと同時存在していたものと思われる。また切り合い関係がないため新旧関係がつかめないが、同時には存在しえない建物としてSB07とSB10、SB06とSB10がある。

建物跡の規模・構造を見ると(第2表)、初めに南北棟の比較的大きな建物が建てられ(SB06)、ついで小規模な東西棟にかわり(SB08・09)、総柱建物のSB05、廊下を持つ

大規摸な建物のＳＢ07で再び南北棟に戻っている。

池跡1とその周辺では、ＳＸ03通路状遺構とＡ－2区トレンチ断面で確認した溝跡(第6図)の埋没後に整地Ⅱがなされて、池跡1、溝跡等が作られている。ＳＸ03通路状遺構とＡ－2区断面の溝からは遺物が出土していないため、時期は不明である。池跡1はⅣ章でのべたように広→狭の2段階に変遷しており、溝跡や土壙で切り合うものも新旧2段階のものが多い。このことから池跡1とその周辺の遺構は、2段階の変遷を経ている可能性がある。

以上のように遺構の変遷は東側の掘立柱建物跡で4ないし5段階、池跡1とその周辺で2段階が想定された。掘立柱建物跡からの出土遺物で時期を知りうる資料は少ないが、池跡1の出土遺物で最も古いのは印判手の紅葉文のある肥前産と考えられる皿(第21図1)で、17世紀末～18世紀という年代幅を持っている。その他の磁器は18世紀～19世紀前半に位置づけられるため、池跡1については構築年代を17世紀末～18世紀初めごろと考えることができ、これは上野館が正式に居館となった明暦3年(1657)以後に該当する。

(3) 遺構の性格

仙台藩士の居館は、「表」の建物が書院と広間の2つの建物を中心として構成されるという特徴がみられる。前述した上野館絵図にみられる館内建物の構成は佐沼亘理氏や登米伊達氏、あるいは片倉氏の白石城・仙台屋敷などの居館の絵図にみられるものときわめて類似しており、家臣の居館構成は規定にしたがって行われたことが知られる（佐藤　前掲書）。

Ａ－1区では柱列の方向による推定ではあるが、検出された建物跡の棟方向がＣ－1区の小規模なＳＢ08・09を除いて変化していないのは、館内にあっては新たに建築されるものをのぞいて建物の位置と用途が大きく変わらなかったことを示すものであろう。

Ｃ－1区東側の掘立柱建物跡集中部は、前述の絵図では武道場と推定される「稽古所」が2棟記されているが、武道場は通常床張りの建物であるから総柱建物のＳＢ05の用途はこれに対応する可能性がある。またＳＢ07は廊下を介して2室以上が連なる大きな建物と推定され、棟方向はＡ－1区で検出された建物跡の一部である柱穴列の方向とほぼ同一である。建物は検出部分の東へ延びると推定されるため、位置からみて礎石立以前の「表」の建物である可能性が大きい。ＳＤ08・09は小規模で棟方向が他と異なる異質な遺構であり、性格は不明である。

再び前述絵図を見ると、「表」の建物の北側には藩主来訪時に使用する「御成書院」があり、西側には池、鷹部屋、塀ないし溝が描かれている。池跡1は絵図にある南西部の池に対応する遺構で、庭園を構成していたものであろう。溝跡は館内の排水や池跡の注排水に関係する遺構と考えられる。池跡南側の土壙群は遺物の出土量が多い点と人為的に埋められた形跡がある点からゴミ穴と考えられるが、他の土壙については性格不明である。またＣ－1区西側にある。

X04通路状遺構は北方向延長線上に稲荷神社西裏の、土塁の一部とみられる高まりがあるため、館の西側をめぐる道路跡の可能性がある。なおⅠ章でふれた天和絵図では館の周囲をめぐる道路は幅9間とあり、現道よりも広かったことになるが、この点は館の外郭部の構造とあわせて今後検討が必要である。

文献で知られる建物の整備についてはⅠ章でふれたように、貞享2年（1685）年の湯殿・厠の新築・元禄元年（1688）の大書院・御座の間（当主の居所）等の普請・元文2年(1737)時点における御成書院の存在が知られる。下屋敷から正式な居館となるに際しては建物の改築・新築がなされていると推定されるが、これまでの調査においては寛永8年(1631)～明暦3年(1657)の「下屋敷」当時の遺構と、明暦3年以後の正式な居館「上野館」の遺構を区別することはできなかった。またA－1区・C－1区における建物跡の重複は上記の記録で知られる以上に館内建物の変遷があったことを示しているが、この変遷には全面的な建て替え以外に部分的な改修も含まれていよう。

平成2年度に予定されている第4次調査では、上野館最末期の礎石立建物より古い段階の「表」の建物群が検出される見通しであるため、掘立柱建物跡の年代等についてより多くの知見の得られることが期待される。

Ⅵ．まとめ

上野館跡の第1次～第3次調査の成果は以下のようにまとめられる。

1.調査の緒果、近世の掘立柱建物跡10棟以上、柱穴列1、打込杭列1、溝跡16、土壙28、池跡2、通路状遺構2、炭窯跡1が検出され、近世の陶磁器と瓦、近・現代の磁器、土師器・須恵器の破片が出土した。

2.各調査区には整地層の検出された部分があり、整地Ⅰ(昭和26年の校地造成時になされた盛土)、整地Ⅰ'(校地を西側に拡張した際の盛土)、整地Ⅱ・Ⅲ(館内の建物等の構築に係わる近世の整地層)、整地Ⅳ(炭窯の構築に係わる近世以前の小規模な整地層)に区別される。

3.遺構のうちＳD08溝跡、ＳD09溝跡、ＳR01炭窯跡は、検出状況からみて古代に位置づけられる可能性が高い。他の遺構のほとんどは近世に位置づけられ、Ａ－1区の掘立柱建物跡群で3段階以上、Ｃ－1区の掘主柱建物跡群で4～5段階、ＳX01池跡で2段階の変遷がみとめられた。これは文献で知られる以上に館内建物の変遷があったことを示している。またＳX01池跡の構築年代は、出土磁器の特徴から17世紀末～18世紀初めごろと推定される。

4.幕末期の館内建物配置が記された絵図では、Ａ－1区とＣ－1区東端の部分は「表」の建物の位置に相当する。館内の建物の最終段階である慕末期の建物跡は礎石立と推定されるため、両地区で検出された掘立柱建物跡は下屋敷構築の寛永8年(1631)から上記礎石立建物以前のある時期までの間に構築され、変遷したと考えられる。また建物跡の棟方向ないし柱穴列の方向はこの変遷のなかで大きく変わることがないため、館内建物の用途と位置は大きく変わらなかったと推定される。なお最終段階の礎石立建物跡は、校地造成の際に削平されたものと考えられる。

5.掘立柱建物跡群を寛永8年（1631）～明暦3年(1657)の「下屋敷」のものと明暦3年以後の「上野館」のものとに区別することはできなかった。

6.遺物はＳX01池跡でややまとまって出土している。磁器は肥前産が主体を占め、このほかに藩内産品である切込焼が少量認められる。陶器で産地の判明するものには大堀相馬焼がある。時期は18世紀代～幕末のものが主体である。

参 考 文 献

梅森三郎　1982(復刻) 「松山城址」 『宮城県史蹟名勝天然記念物　3』　国書刊行会

茂庭邦元、鈴木重郎、宮本制一　1980 「第4章　近世の松山」 『松山町史』松山町史編纂委員会

平凡社　1981 「日本やきもの集成　1　北海道　東北　関東」

平凡社　1981 「日本やきもの集成　Ⅱ　九州I」

西田宏子、大橋康二ほか　1988 「古伊万里」 『別冊太陽　日本のこころ63』　平凡社

大橋康二　1989 「肥前陶磁」 ニューサイエンス社

植村和堂　1980 「和硯と和墨」 理工学社

佐藤広史、伊藤　裕、手塚　均　1990 「切込窯跡」 宮崎町教育委員会

都立上野高等学校遺跡調査会　1988 「東叡山寛永寺護国院」

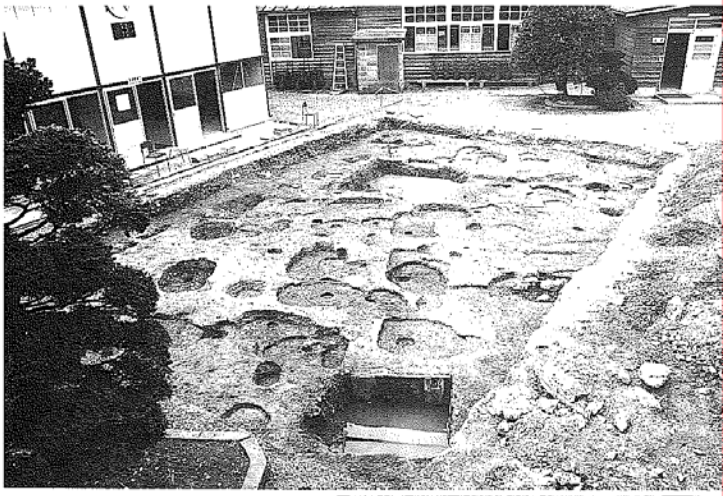
佐藤　巧　1979 「近世武士住宅」 叢文社

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　「東北大学埋蔵文化財調査年報　1」

結城慎一、佐藤　洋　1985 「仙台城三ノ丸跡」 仙台市文化財調査報告書第76集

写　真　図　版

写真図版１



ＰＬ１．Ａ－１区遺構検出
状況

ＰＬ２．Ａ－２区トレンチ

ＰＬ３．Ａ－２区トレンチ
ＳＸ01池跡検出
状況

ＰＬ４．Ａ-３区トレンチ

ＰＬ５．Ａ-３区トレンチ
深掘り部分

ＰＬ６．Ａ-３区トレンチ
深掘り部分

写真図版３

ＰＬ７．ＳＡ01柱穴列

ＰＬ８．ＳＡ02打込杭列
（掘方は持たない）

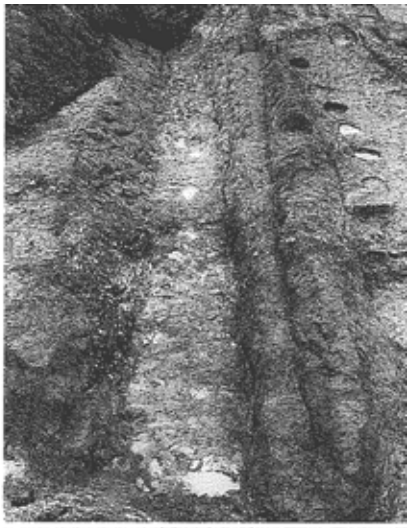
ＰＬ９．ＳＡ02打込杭列
検出状況

ＰＬ10.Ｃ－１区東側の建物跡群と溝跡・炭窯

ＰＬ11.ＳＤ07溝跡

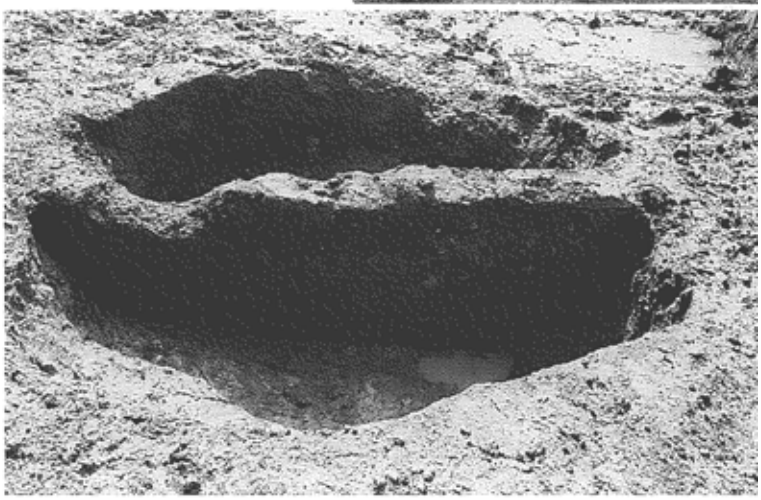
ＰＬ12.ＳＤ08溝跡（左）とＳＤ09溝跡（右）

写真図版 5



ＰＬ13．ＳＤ15溝跡（左）

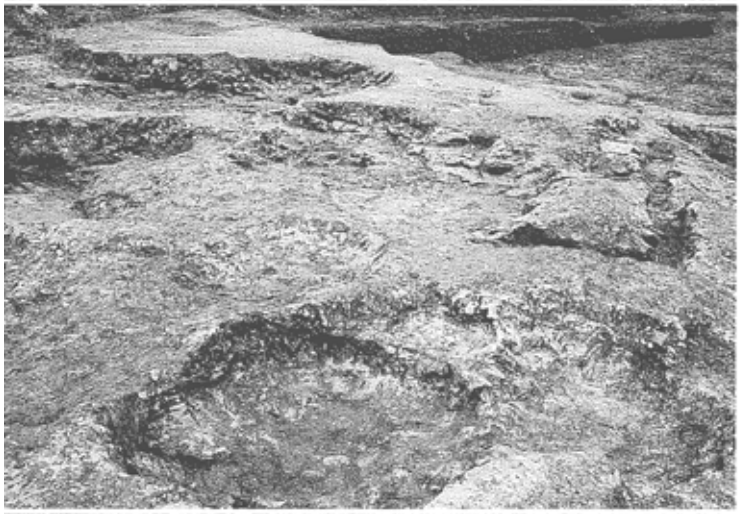
ＰＬ14．ＳＤ13溝跡



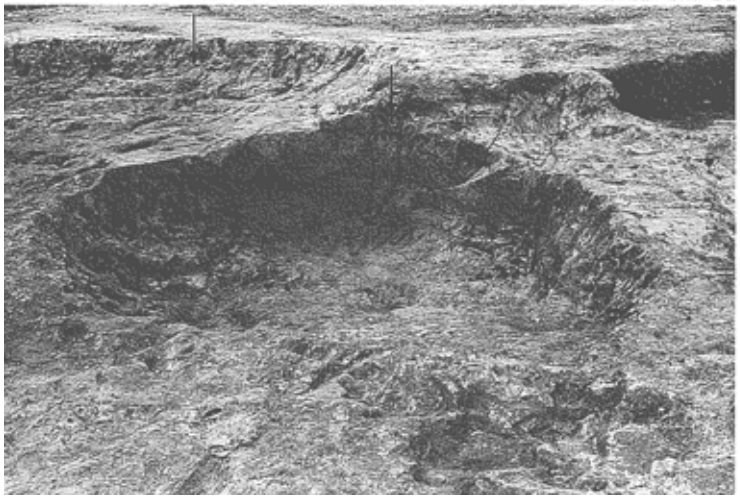
ＰＬ15．ＳＫ01土壙

写真図版 6

ＰＬ16. ＳＫ02･05・18土
壙周辺(手前)と
ＳＸ04通路状構(奥)

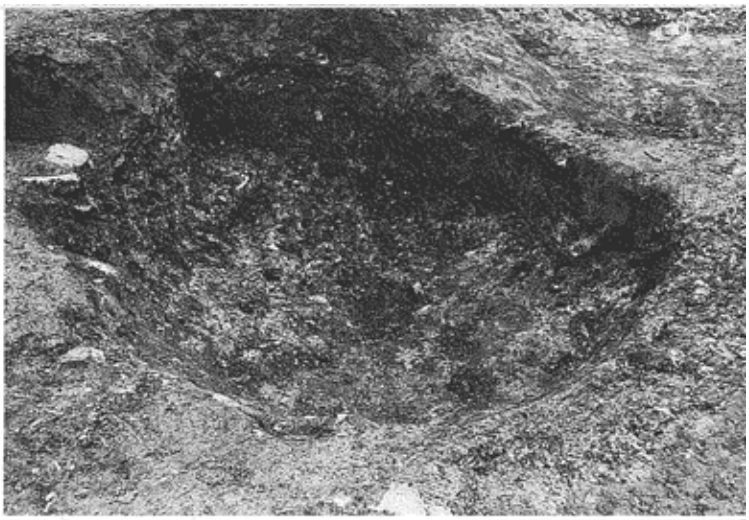


ＰＬ17. ＳＫ02･05･18土
壙周辺



ＰＬ18. ＳＫ02土壙(奥)
ＳＫ05土壙(手前)

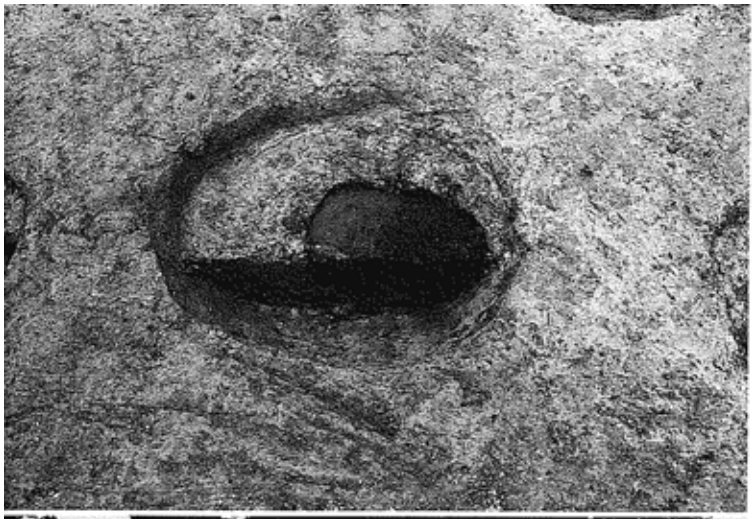
写真図版７



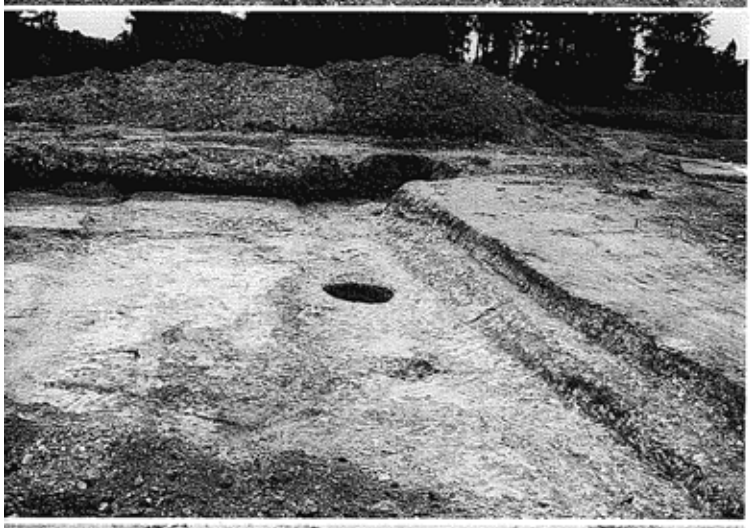
ＰＬ19.ＳＫ13土壙

ＰＬ20.ＳＸ01池跡

ＰＬ21.ＳＸ03通路状遺構（左）とＳＤ15溝跡（右）



ＰＬ22．ＳＸ03通路状遺構の柱穴（柱抜き取り痕がある）



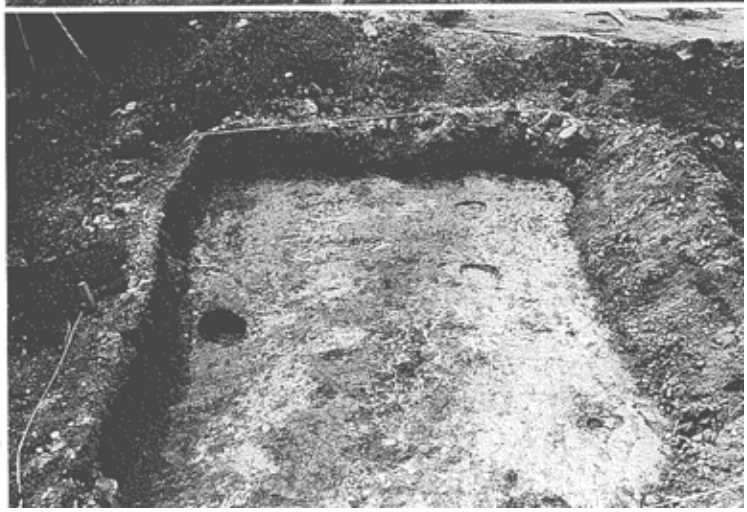
ＰＬ23．ＳＸ04通路状遺構とＳＫ06土壙

ＰＬ24．ＳＲ01炭窯跡

写真図版９

ＰＬ25.ＳＲ01炭窯跡(前庭部から焚口方向)

ＰＬ26.ＳＲ01炭窯跡(前庭部断面。↓は焚口天井石)



ＰＬ27.Ｃ－２区遺構検出状況

写真図版10

出土遺物（1～7：A-1区。8～18：SX01池跡）

写真図版11

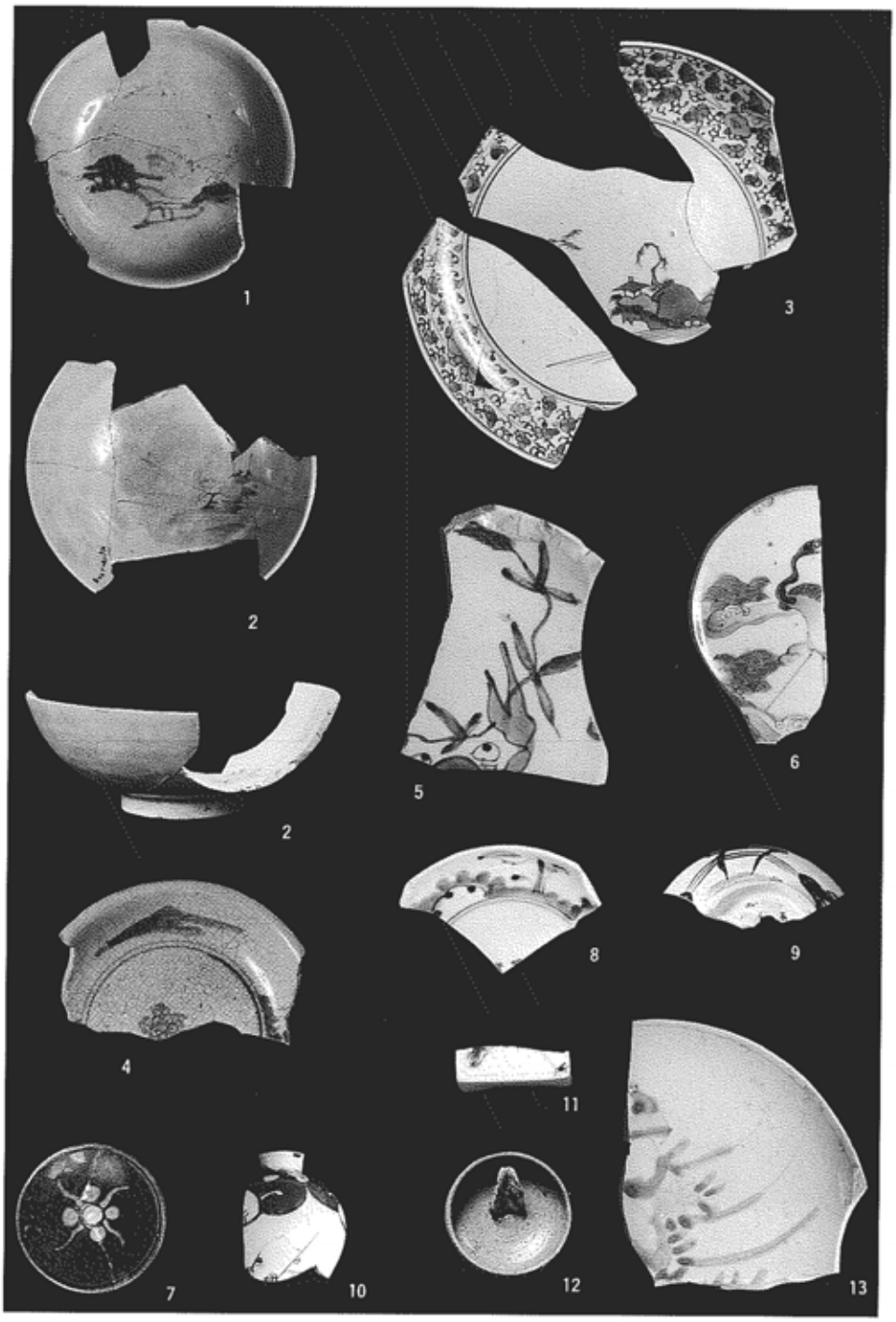
出土遺物（9を除きＳＸ01池跡）

写真図版12

出土遺物（1～3：ＳＸ01池跡。4～7：ＳＸ02池跡。８～10：土壙）

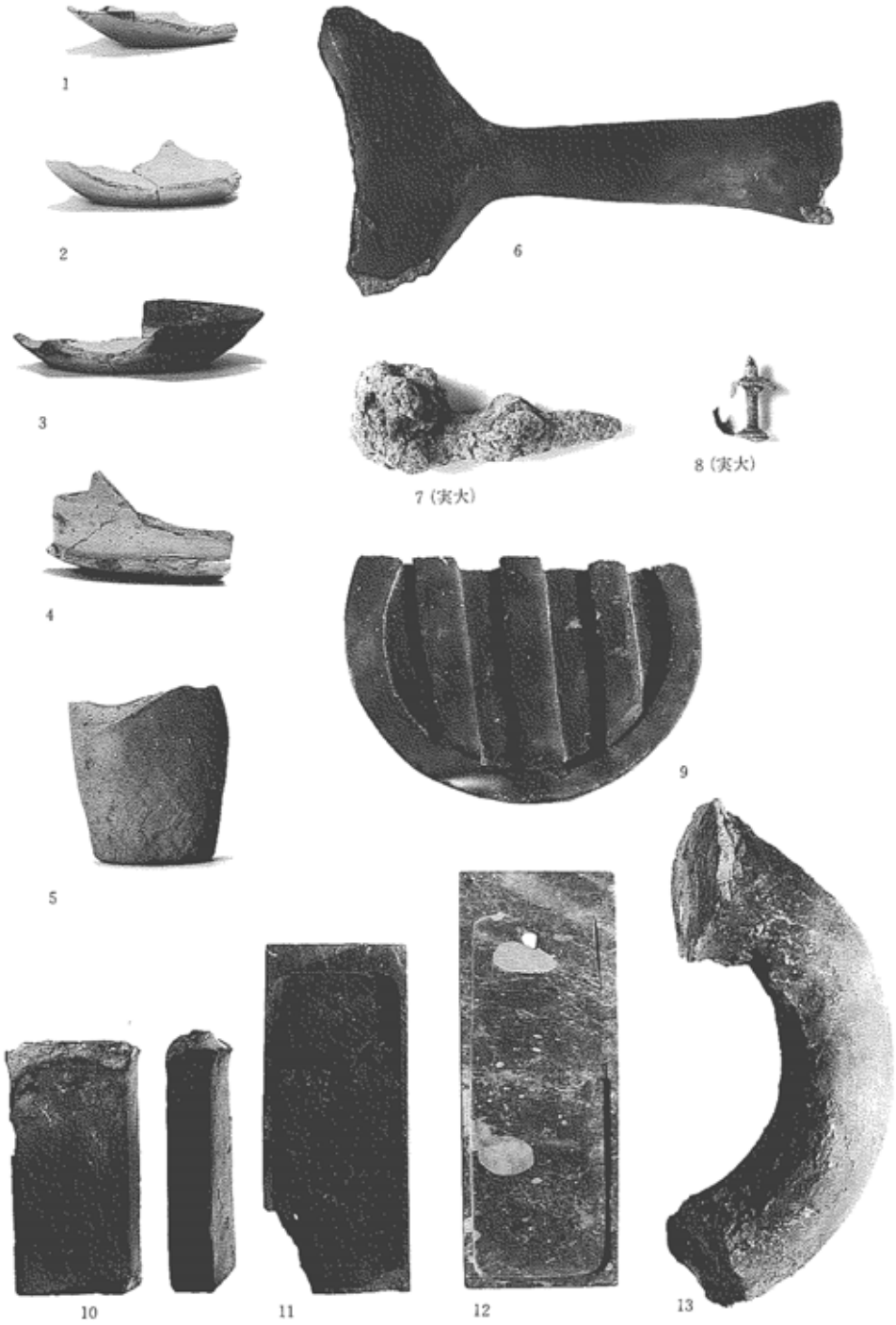
写真図版13

出土遺物（土　壙）



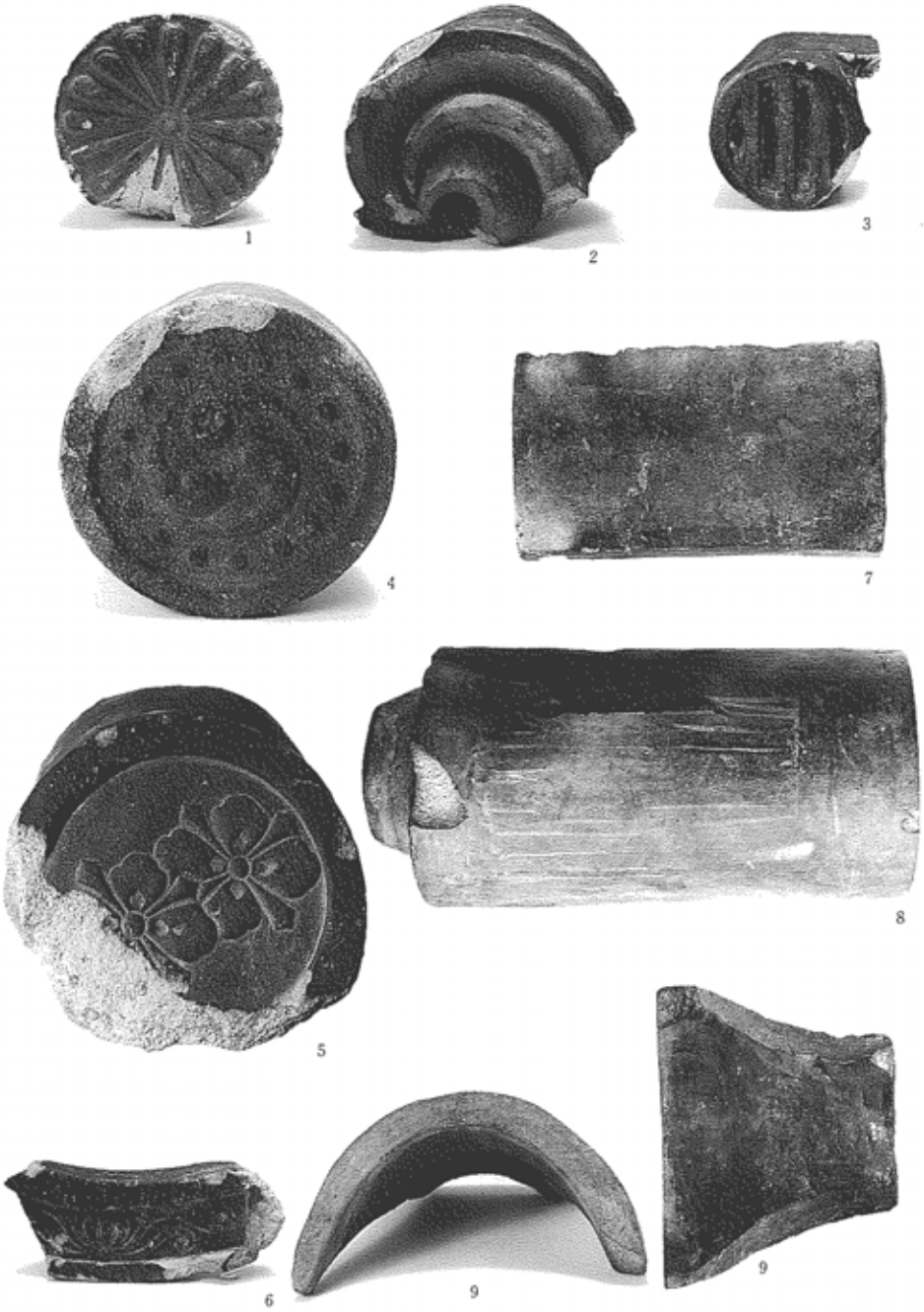
写真図版14

出土遺物（1～7：土壙。8～13：遺構外）



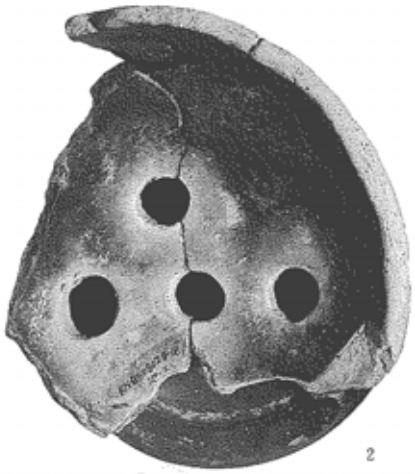
写真図版15

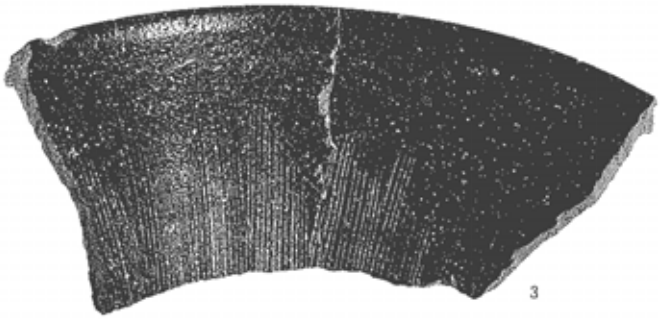
出土遺物（各地点出土の土師質・瓦質土器など）



写真図版16

出土遺物（各地点出土の瓦類）





写真図版17

出土遺物（瓦質・土師質土器と陶器）